
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第60集

小台遺跡（第7次）

1999.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第60集

小台遺跡（第7次）

1999.3

深谷市教育委員会

序

このたび、深谷市教育委員会では、「小台遺跡（第7次）」の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

小台遺跡も、古くは昭和32年の調査を皮切りに、今回で既に7度目の発掘調査になります。この間、常に新しい発見があり、当遺跡が深谷市を代表する縄文時代の大きな集落跡であることが分かってきました。今回の調査も面積は狭小ながら、3軒の住居跡が姿を現しました。また出土した土器や石器も膨大な量に及び、深谷市の歴史を考えるうえで、大変貴重な資料といえます。

近年深谷市も、他市町村の例に漏れず、様々な開発が盛んに行われております。このような状況の中、失われつつある埋蔵文化財を保護し、後世に伝えて行くことは私達の大きな課題となっております。

この成果を報告書というかたちにまとめ、広く市民の皆さんにご紹介することで、郷土の歴史の古さやその優れた文化についてご理解を深めていただきたいと存じます。また、この報告書が学術研究はもとより、学校教育、社会教育などの生涯学習活動を通じて文化財保護精神の高揚に役立てば、望外の喜びであります。最後に、今回の発掘調査にあたり深いご理解とご協力をいただきました関口和正氏をはじめ、関係者の皆様に心から感謝し、お礼を申し上げまして序にかえさせていただきます。

平成11年 3月

深谷市教育委員会

教育長 加藤 和 説

例 言

1. 本書は、埼玉県深谷市上野台字御屋敷2345-1における、分譲住宅の建築に伴う遺跡発掘調査報告書である。事業名は、小台遺跡第7次発掘調査とした。
2. 発掘調査は、関口和正氏の委託を受け深谷市教育委員会が主体となって実施し、調査費用については、関口和正氏が負担した。
3. 発掘調査期間は、平成10年5月6日から平成10年5月29日までである。
4. 発掘調査および出土遺物の整理、報告書の執筆は知久裕昭が担当した。
5. 遺跡の基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。
6. 本書に掲載した挿図類の縮尺は、原則としては次のとおりである。
遺構 住居跡・土壇 1/60、埋没谷 1/80、炉跡・埋甕 1/30
遺物 土器実測図 1/5、土器拓影図・土製品・石器実測図 1/4
7. 遺跡原点は、国家方眼座標 $X = 19875.000$ 、 $Y = -49040.000$ である。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。
8. 遺構実測図中の水系レベルは、特に記さないものは、標高56.200mに統一した。
9. 遺物の註記、および原図における遺構の略号は次のとおりである。
住居跡…S J、土壇…S K
10. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、次の諸氏から数々のご指導ご助言を賜った。
磯崎 一 澤出晃越 鈴木孝之 鈴木秀雄 竹野谷俊夫 田中英司
鳥羽政之 橋本 勉 細田 勝 村田章人 (敬称略)

発掘調査の組織

調査主体者	深谷市教育委員会	教 育 長	加藤和説
		教育次長	逸見 稔
事 務 局	深谷市教育委員会社会教育課	課 長	根松文良
		課長補佐	金井秀夫
		文化財保護係長	石川 博
		主 任	古池晋禄
		主 事	青木克尚
		主 事	富田和利
	調査担当者	主 事	知久裕昭

調査参加者

阿部ルリ子	池田敦子	大沢日出子	大澤大美	大原黎子	小野寺和子
河合詔子	加瀬智子	加瀬律子	久米紀子	小沼和子	西方寺容子
里山まり子	島津芳子	砂田伊久子	高田秀子	滝沢はつえ	田中美樹
知久祥子	都築百合子	中野文子	根岸邦子	浜野光子	細川ケイ
前田悠子	本橋玲子	森 光代	諸岡美樹子	吉野真由美	

目 次

序	
例言	
I 発掘調査の経過	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の経過	1
II 小台遺跡の概要と周辺遺跡の様相	2
III 遺構と遺物	5
1 住居跡	5
2 土 壙	14
3 ピット群	21
4 埋没谷	22
5 グリッド出土遺物	40
IV 結 語	43

挿図目次

第1図 周辺の縄文時代遺跡分布図	3	第18図 埋没谷実測図および遺物分布図(1)	23
第2図 小台遺跡の位置と発掘調査区	3	第19図 埋没谷遺物分布図(2)	24
第3図 遺跡全体測量図	4	第20図 埋没谷出土遺物(1)	25
第4図 第1号住居跡実測図	6	第21図 埋没谷出土遺物(2)	26
第5図 第1号住居跡出土遺物(1)	7	第22図 埋没谷出土遺物(3)	27
第6図 第1号住居跡出土遺物(2)	8	第23図 埋没谷出土遺物(4)	28
第7図 第2・3号住居跡実測図	10	第24図 埋没谷出土遺物(5)	29
第8図 第2・3号住居跡炉跡実測図	11	第25図 埋没谷出土遺物(6)	32
第9図 第2号住居跡出土遺物	11	第26図 埋没谷出土遺物(7)	33
第10図 第3号住居跡出土遺物	12	第27図 埋没谷出土遺物(8)	34
第11図 第2・3号住居跡ピット出土遺物	13	第28図 埋没谷出土遺物(9)	35
第12図 土壙実測図(1)	15	第29図 埋没谷出土遺物(10)	36
第13図 土壙実測図(2)	16	第30図 埋没谷出土遺物(11)	37
第14図 土壙出土遺物(1)	17	第31図 埋没谷出土遺物(12)	38
第15図 土壙出土遺物(2)	19	第32図 埋没谷出土遺物(13)	39
第16図 ピット群実測図	21	第33図 グリッド出土遺物	41
第17図 ピット出土遺物	21		

表 目 次

第1表 石器計測表……………42

図版目次

図版1 調査区全景 第1号住居跡 第1号住居跡炉跡 第1号住居跡埋甕 第2号住居跡 第2号住居跡炉跡
第3号住居跡(1)

図版2 第3号住居跡(2) 第3号住居跡炉跡 第3号住居跡遺物出土状況(1)
第3号住居跡遺物出土状況(2) 配石遺構 埋没谷 埋没谷遺物出土状況(1)
埋没谷遺物出土状況(2)

図版3 グリッド遺物出土状況 第1、2号土壙 第5号土壙 第9号土壙 第13号土壙 第13、18号土壙
第14号土壙 第15～17号土壙

図版4 第1号住居跡1 第1号住居跡2 第1号住居跡3 第2号住居跡1 第3号住居跡1 第3号住居跡2
第12号土壙16

図版5 第13号土壙1 第13号土壙2 第14号土壙1 埋没谷1 埋没谷2 埋没谷4 埋没谷5

図版6 埋没谷6 埋没谷7 埋没谷13 埋没谷14 埋没谷15 埋没谷16 埋没谷18

図版7 埋没谷23 グリッド1 第1号住居跡出土遺物(1)～(2) 第3号住居跡出土遺物(1)～(2)
第2号住、第2・3号住ピット出土遺物 土壙出土遺物(1)

図版8 土壙出土遺物(2) 埋没谷出土遺物(1)～(7)

図版9 埋没谷出土遺物(8)～(13) ピット、グリッド出土遺物 グリッド出土遺物

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

深谷市は埼玉県北部に位置する、総面積69.4㎢、人口約103,000人の都市である。農業、工業ともに盛んで、古くから深谷ネギの産地として有名である。歴史的に見ても、小台遺跡の営まれる縄文時代をはじめ、深谷上杉氏の拠点であった室町・戦国時代、宿場町として栄えた江戸時代、そして近現代まで多くの遺跡、文化財が残され、非常に重要な土地であると言えよう。近代日本経済界を築いた渋沢栄一の生地としても良く知られる。

現在、市のほぼ中央には国道17号線、JR高崎線が東西に併走し、その沿線を中心として市街地が広がる。JR高崎線の南を走る南大通り線の北側の地域は、特に開発が目立つ場所である。小台遺跡は主に、こうした開発に伴って調査が行われ、その回数も今回で既に7度目を数える。調査地点は開発状況を反映して、遺跡の北側に集中している。今回も同様であり、過去の調査区にも隣接している場所である。

平成10年3月30日、小台遺跡内の深谷市大字上野台宇御屋敷2345番地1号に分譲住宅が建設される計画があることが明らかになった。

市教育委員会は、平成10年4月6日に試掘調査を行い、その結果、遺構および縄文土器等が検出された。そのため発掘調査の実施について、教育委員会と原因者側とで協議を行い、深谷市教育委員会が主体となって発掘調査を実施することで合意した。

深谷市教育委員会は、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づき、平成10年4月23日付けの深教社発第123号で埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官宛提出し、準備にはいった。

なお、埼玉県教育委員会教育長から、平成10年4月27日付けの教文第3-48号で指示通知を受けた。

2 発掘調査の経過

平成10年4月27日付けで、深谷市教育委員会と、事業主である関口和正氏との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結された。この契約に基づき実施された、小台遺跡第7次発掘調査の経過は概ね以下の通りである。

4月30日（木）、5月1日（金） 表土剥ぎ、発掘調査準備、器材搬入。

5月6日（水） 器材搬入、周辺環境整備、遺構確認作業、埋没谷調査、基準点測量。

5月7日（木） 遺構確認作業、埋没谷調査、写真撮影、基準点測量。

5月8日（金） 遺構調査、埋没谷調査。

5月11日（月） 遺構調査、埋没谷調査、実測、写真撮影。

5月12日（火） 遺構確認作業。

5月13日（水）～27日（水） 遺構調査、埋没谷調査、実測、写真撮影。

5月28日（木） 埋没谷調査、実測、写真撮影。

5月29日（金） 写真撮影、器材搬出。

6月1日（月） 埋め戻し。

調査面積は約200㎡と狭小ながらも、3軒の住居跡、18基の土壇、集落の中央を走る埋没谷、多量の縄文土器、石器等が出土し、大きな成果を得ることができた。試掘調査の結果から予想していた状況を遥かに超える成果に、大きな驚きを感じるとともに、この歴史資料をおおいに生かしていかなければならない責任を感じる。

今回の発掘調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただいた関口和正氏をはじめ、この文化遺産を記録保存し、後世に伝える作業のためにご協力いただいた全ての方々に敬意を表する。

II 小台遺跡の概要と周辺遺跡の様相

深谷市は、市内のほぼ中央を東西に走るJR高崎線付近を境に、北部の妻沼低地と南部の櫛挽台地に分かれています。櫛挽台地は荒川により形成された洪積扇状台地で、現在の唐沢川付近を境界として、西側の標高50～80mの櫛挽面と東側の35～65mのやや低い寄居面より成っている。櫛挽面はJR高崎線沿いの崖線をもって利根川の沖積作用により形成された妻沼低地と接するが、寄居面はJR高崎線より1.5～1.8kmほど北へ延びており、比高2～5mをもって妻沼低地と接する。

小台遺跡は埼玉県深谷市大字上野台の東端部、JR高崎線深谷駅から南へ約1.2kmに所在し、唐沢川により南北に開析された谷沿いに位置する。標高は、52～60mである。遺跡の規模は約250000㎡に及ぶと推定され、縄文前期から後期にわたり、人々が生活を営んできた足跡が窺える。その集落は、縄文中期中葉から後期前葉にかけて最も栄えていたと考えられる。

櫛挽台地上という立地条件もあり、小台遺跡の周辺には縄文時代の遺跡が数多く分布している。前期は周辺での調査があまり進んでおらず、若干の遺物を散見するにとどまっている。なお、21の割山遺跡では、古墳時代後期の粘土採掘坑等から諸磯a式の土器片が、比較的多く出土している。中期は特に後半になると遺跡数は急増する。しかしこれまでの調査では、遺物がわずかに出土したのみである。後期の遺跡は幾つかあり、この内6の桜ヶ丘組石遺跡が昭和30年に調査されている。この時の出土土器は極微量であり、時期は確実ではないものの、後期の遺跡と推定されている。

小台遺跡はこれらの遺跡の中で最も規模が大きく、この地域の中核的な集落遺跡の一つと考えられる。最初の調査は、昭和32年、耕作中の縄文土器片等の発見が発端で、深谷市教育委員会により行われた。当時の調査地点は明確ではないが、炉跡等が検出されている。

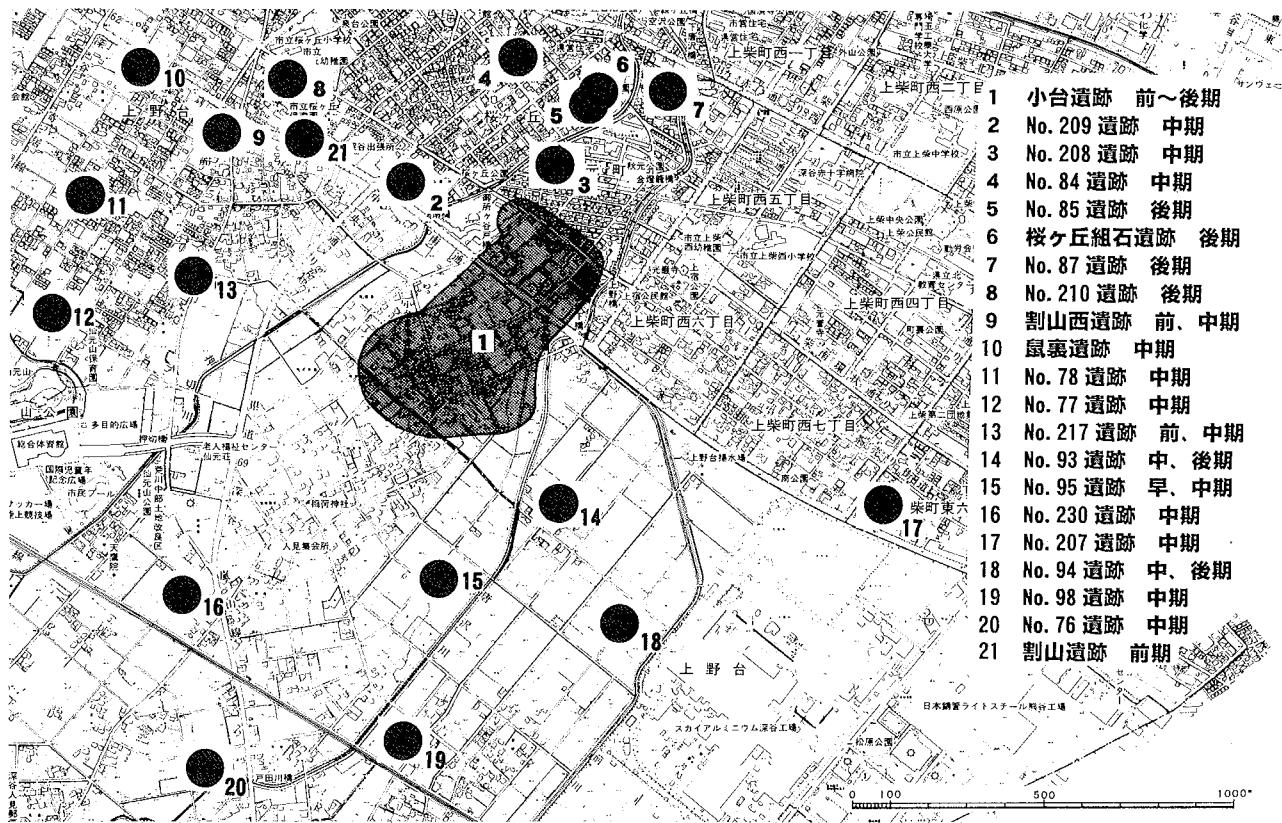
昭和53年には南大通り線の建設に伴い、深谷市小台

遺跡調査団により第2次発掘調査が実施され、12軒の住居跡等が検出された。続いて昭和56年には、深谷市遺跡詳細分布調査により、遺物散布範囲は20ha以上に及ぶことが確認され、深谷市の縄文時代を考えるうえで欠かすことのできない遺跡であることが再確認された。その後の調査では、住居跡の他に、縄文中期後半から後期前葉の遺物を多量に包含する埋没谷が走ることが確認されている。また黒浜式、諸磯式土器の小破片がわずかながら出土しており、前期の遺構が今後の調査で検出されることが期待される。

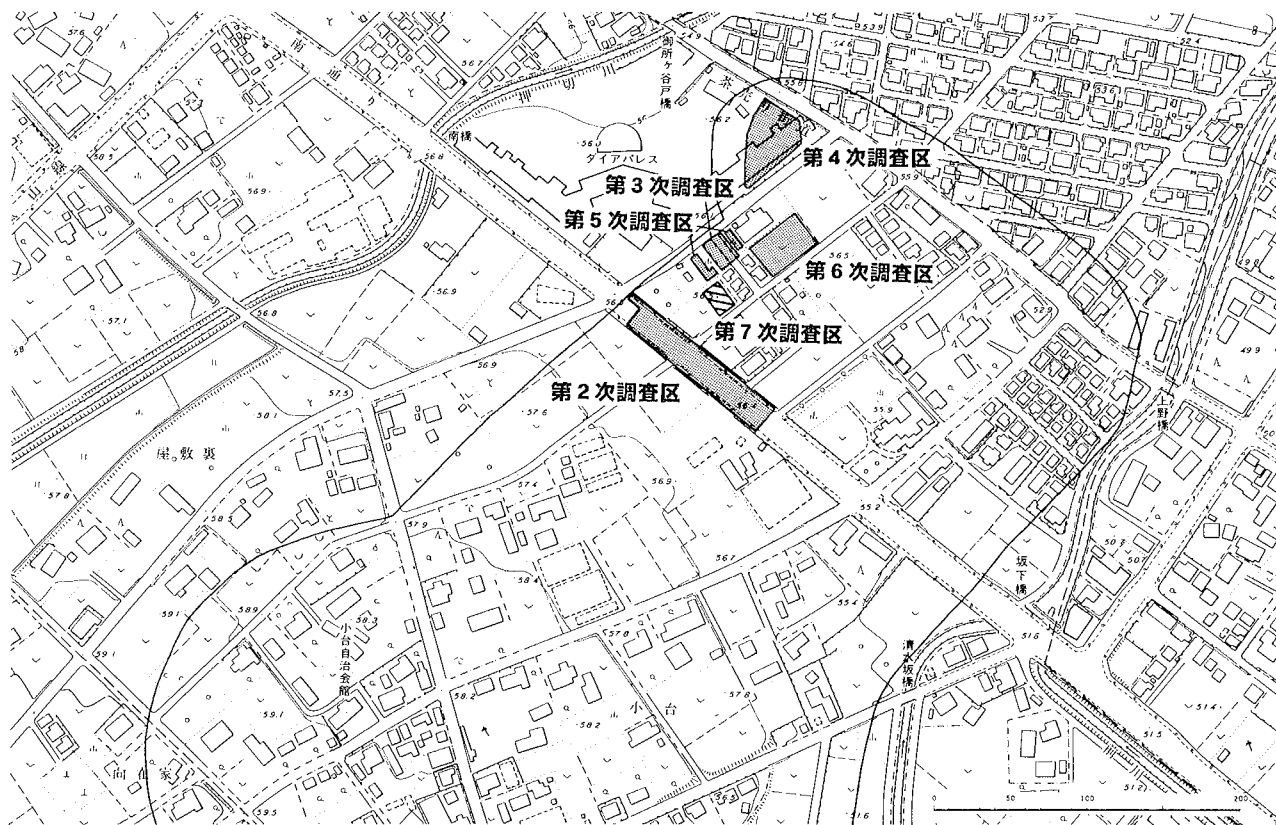
今回報告する第7次調査では、3軒の住居跡と18基の土壇群、および埋没谷が検出された。出土遺物の量は膨大なもので、コンテナ25箱にのぼった。現地表面から確認面までの深さは約30～50cmと浅く、住居跡の覆土はほとんど失われている。しかしそれぞれの住居の炉跡は、遺存状態が良好であった。第1、2号住居跡は埋甕炉、第3号住居跡は2基の地床炉をもつ。第1、2号住居跡は中期後半、第3号住居跡は後期前半の所産である。第3号住居跡の南には配石遺構も付随する。また調査区南部の壁際からは、単独の伏甕が出土している。この土器は中期中葉中峠式期のものであり、該期の住居跡が存在していた可能性がある。

土壇に関しては、第13、14号土壇から中期中葉中峠式期の良好な資料が出土している。その他の土壇は時期決定が難しいが、ほとんどはロームを多く含む黒褐色土を覆土とする点で共通する。

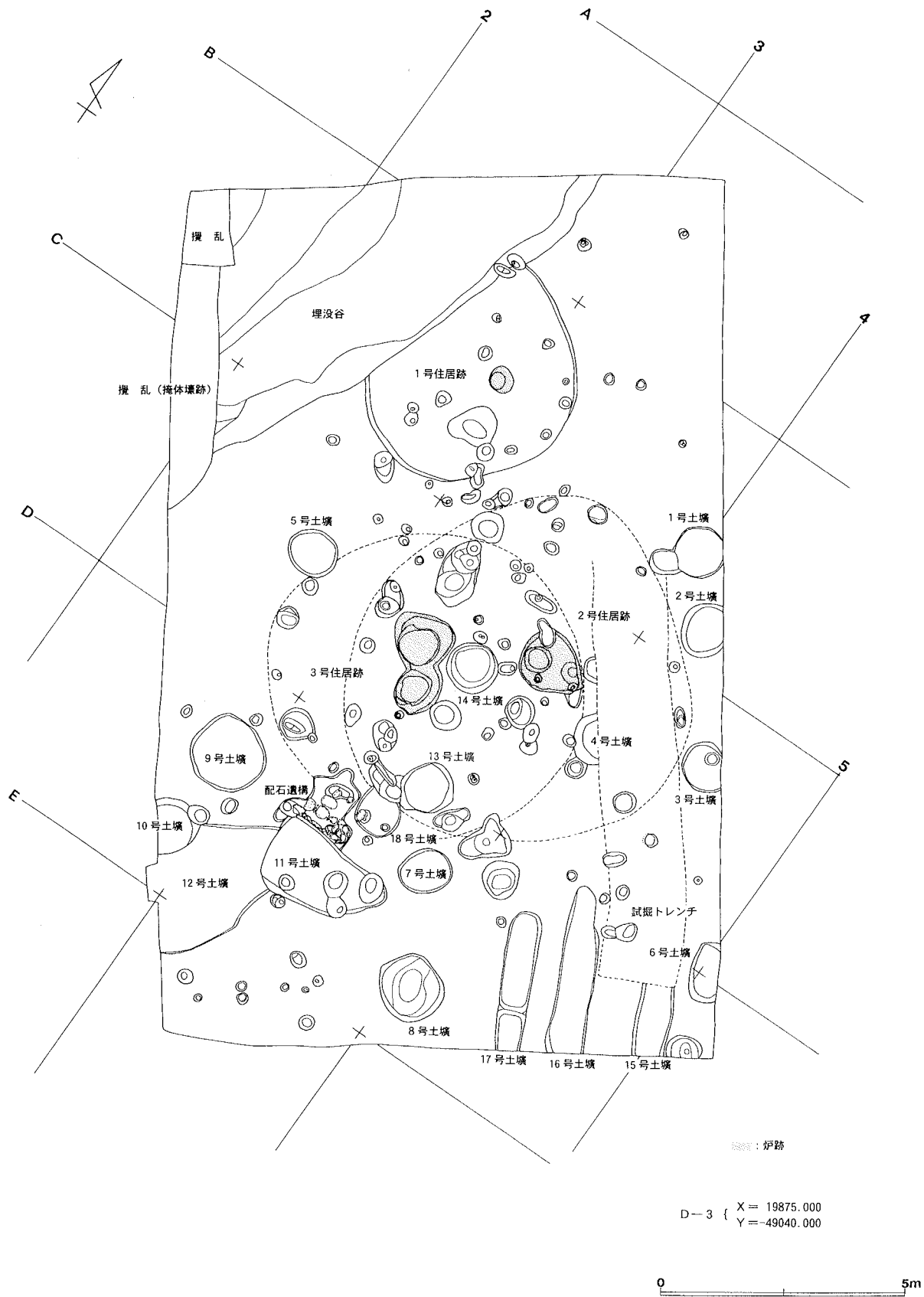
埋没谷は第3、5次調査で検出された隣接箇所にあたる。出土遺物は特に後期初頭のものが多く、復元個体も多数にのぼる。この谷は集落の中央を走っており、集落の営みに大きな影響を与えた可能性がある。また、南端部は旧日本軍の飛行機格納施設である掩体壕による攪乱を受けている。調査にはおよばなかったものの、戦時中の遺構を確認できたことは、大きな成果である。



第1図 周辺の縄文時代遺跡分布図



第2図 小台遺跡の位置と発掘調査区



第3図 遺跡全体測量図

Ⅲ 遺構と遺物

小台遺跡第7次発掘調査において検出された遺構は、住居跡3軒、土壇18基、ピット51基、および遺物を多量に包含する埋没谷である。その他に、D-2グリッドで伏甕が1点出土しており、住居跡であった可能性がある。ピット深度はそれぞれ図中に示した。また、石器については第1表の石器計測表を参照していただきたい。

なお、調査区内における遺構の分布状況は、第3図に示したとおりである。

1 住居跡

第1号住居跡（第4図）

本住居跡は、B-2、B-3グリッドに位置し、北西部を埋没谷によって侵食されている。平面形態は円形を呈すると思われる。直径約4.5m、確認面からの深さは0.03cmを測る。本住居跡に伴うと考えられるピットは13基、住居の壁際を中心に検出された。また炉跡、埋甕が住居跡の中心よりやや東寄りで見出された。

炉は埋甕炉であり、南側に細長い河原石を4個配している。覆土には焼土があまり含まれず、また縁に配された河原石もあまり焼けていないため、短期間の使用とも考えられる。2の深鉢は炉を覆うように出土した。内面を上にし、片側が遺存していないことから、後世の攪乱を受けていると思われる。また周辺には、大小の礫が分布していた。

埋甕は炉跡から約1m離れて検出された。やや斜めに、正位に埋設されている。口縁部の一部が床面上に突出していた状況が考えられる。

本住居跡は出土土器から、加曾利EⅢ式期の所産と考えられる。

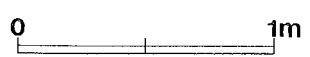
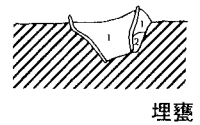
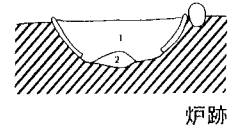
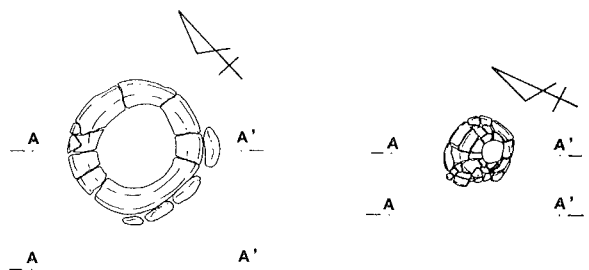
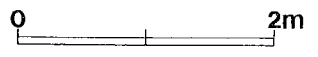
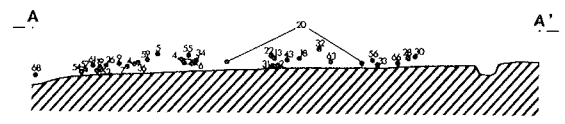
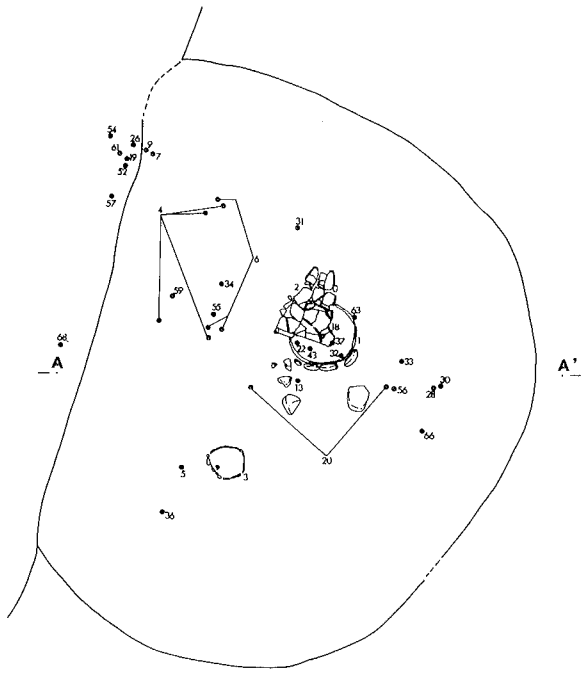
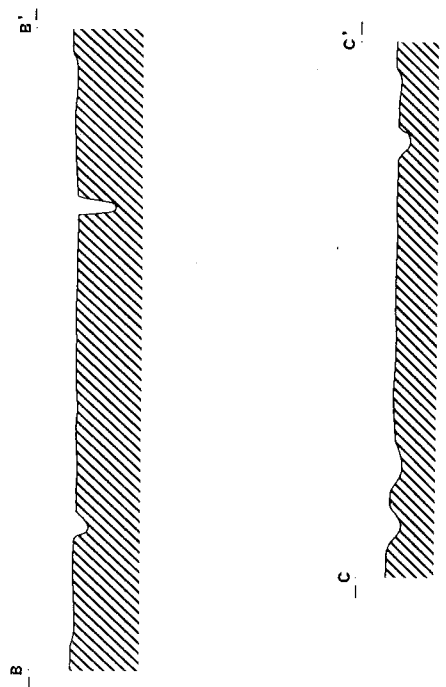
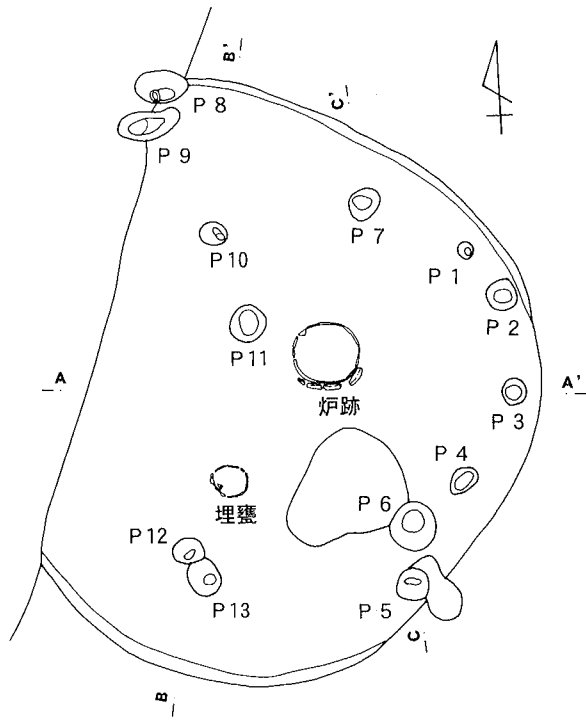
第1号住居跡出土遺物（第5、6図）

1～6は加曾利EⅢ式土器である。1は炉体土器で

ある。口径32.6cmを測り、4単位の小突起をもつ。口縁部は、小突起下に小区画文を配し、その間を大区画文とする構成を取る。大区画文は2分されたものが1ヶ所ある。胴部はRLの縄文帯と無文帯が交互に垂下する。2は平縁土器である。文様構成は1とほぼ同じである。3は埋甕である。口径25.3cmを測り、4単位の小突起をもつ。底部付近は欠損している。口縁部は貧弱な隆帯で、小さな窓枠状の区画が行われる。区画は小突起の下に1つずつ、それらの間に2つずつ配される。胴部はRLの縄文帯と無文帯が交互に垂下する。器面の摩耗がやや著しい。4は口縁部でかなり内湾する器形をもつ。蕨手文と貧弱な沈線による∩字文が施される。縄文はRLが使用される。5は口縁部に窓枠状の区画が行われ、胴部はLRの縄文帯と無文帯が交互に施される。6は波状文と蕨手文が施された土器である。胴中で強く屈曲し、波状文の下端が屈曲部と一致する。縄文はRLが使用される。

7～10は中期中葉の所産である。7は隆帯上がハの字に刻まれる。8は隆帯で区画された中に、鋭い刻みが施される。還元し、色調は灰色を呈する。9は竹管状工具による平行沈線、10は角押文が施文された土器である。

11～55は加曾利E式期の資料である。11は突起の一部であろう。裏面の整形はやや雑な感がある。12は口縁部がやや肥厚し、その下にLの撚糸文が施される。13、14は小突起と窓枠状の区画をもつ。13はRLの縄文が施文される。15は渦巻き文が残存する土器である。縄文はRLが施文される。16は区画内にRLの細かい縄文が施される。17は口縁部文様の下端のみ隆帯を貼付した土器である。RLの縄文が施され、胴部に幅狭の無文帯が垂下する。18は口辺部の区画内に、円形の刺突が施される。胴部には集合沈線が施される。小石を多く含み、内面整形も雑である。19は∩字文が描か



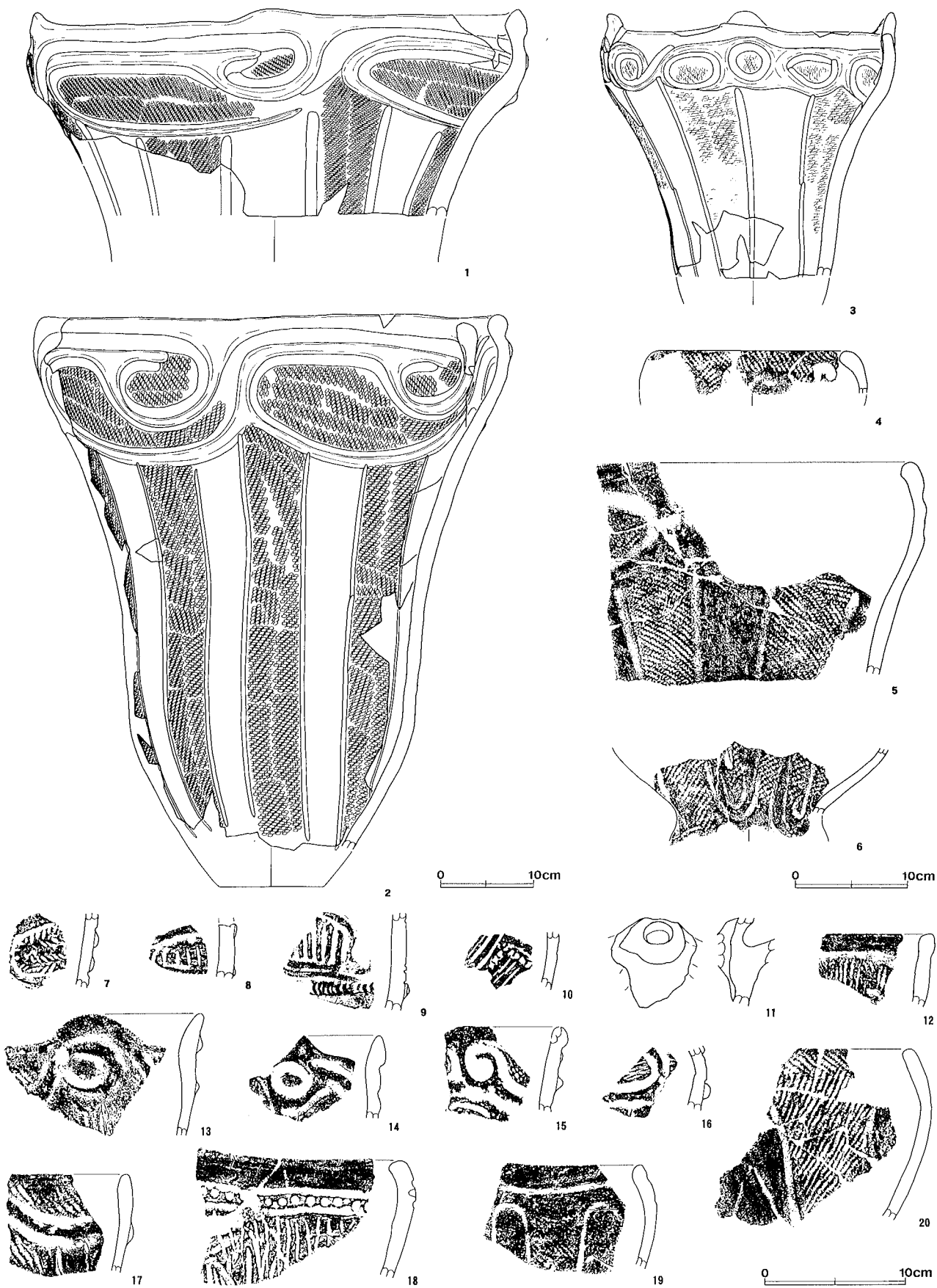
ピット深度 (cm)

P 1	9	P 8	32
P 2	21	P 9	20
P 3	8	P 10	28
P 4	10	P 11	9
P 5	12	P 12	12
P 6	10	P 13	9
P 7	9		

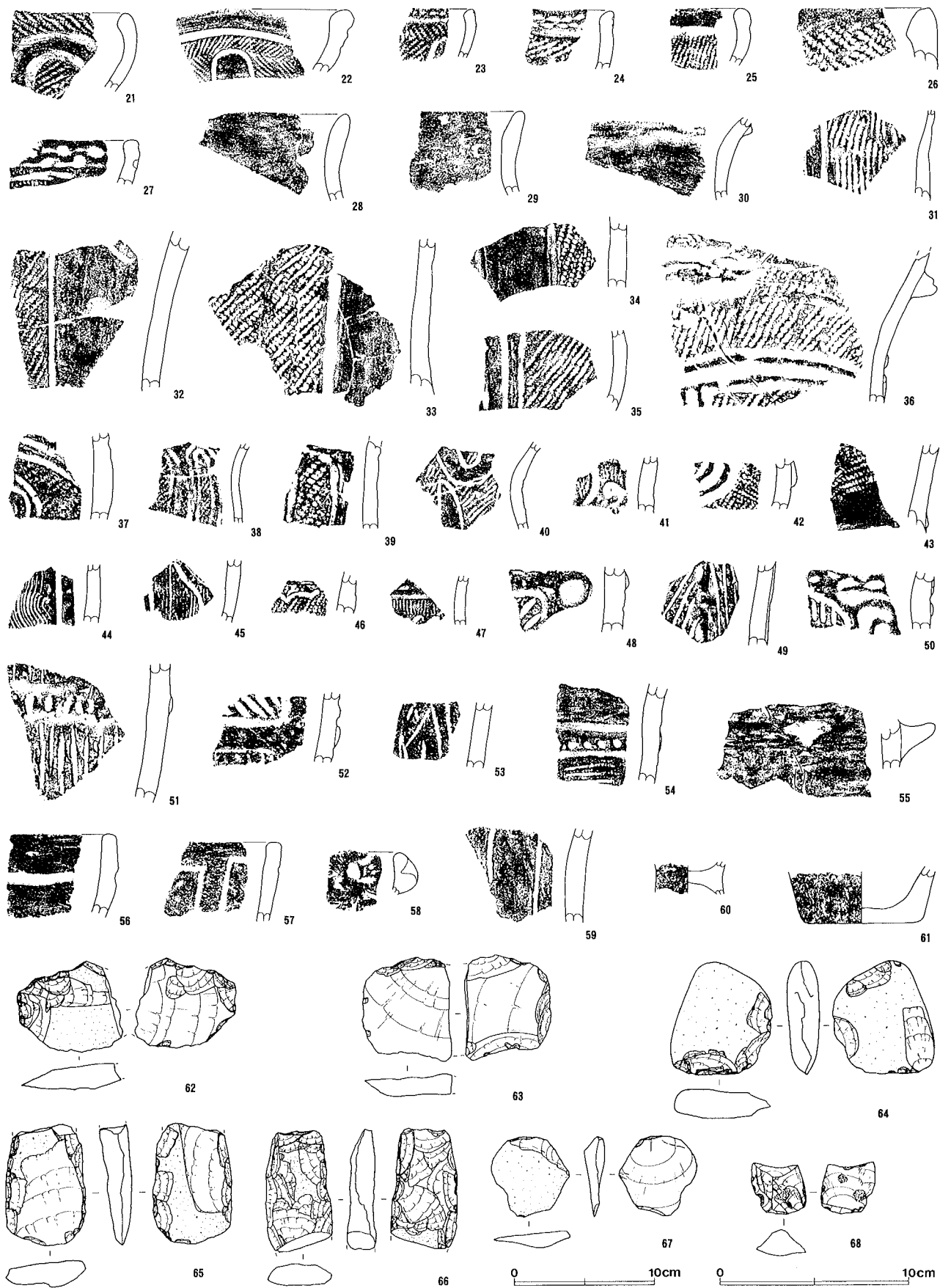
第1号住居跡炉跡
 1層 暗茶褐色土 焼土粒・炭化粒をわずかに含む。
 2層 茶褐色土 焼土ブロック・炭化粒を含む。

第1号住居跡埋葬
 1層 暗褐色土 ローム粒・炭化粒を少し含む。
 2層 黄褐色土 黒褐色土を少し含む。

第4図 第1号住居跡実測図



第5图 第1号住居跡出土遺物(1)



第6图 第1号住居迹出土遺物(2)

れる。焼成は不良で、遺存状態も良くない。20、21はRLの縄文と∩字文が施される。22はLRの縄文と∩字文が施される。23、24は口縁下に刺突が施される。23はRLの縄文と∩字文、24はLRの縄文が施文される。25は横に巡る沈線下に、RLの縄文が施される。26は節の大きなRLの縄文が施される。内面には強い稜をもつ。27は交互刺突が施される。28、29は壺形土器の口縁部である。31～35は胴部にRLの縄文帯と無文帯とが垂下するものである。36は隆帯によって口縁部、頸部、胴部が区画される土器である。口縁部と頸部を区画する隆帯は特に張り出し、隆帯上に沈線が引かれる。地文にRLの縄文、胴部には隆帯による懸垂文が施される。37、38は波状文等が描かれる。共に器面の摩耗が著しい。39は∩字文の中に、RLの縄文が充填された土器である。40は波状文とやや先の尖った∩字文が描かれる。縄文はRLが施文される。41は撚糸文を地文にし、蕨手文等が描出される。42は口縁部付近の資料であろうか。RLの縄文を地文にし、2本の隆帯で弧状の文様が描かれる。43は微隆起線が用いられた土器である。微隆起線の両側は幅広になぞられ、RLの縄文が施文される。44、45は地文に条線が施されたものである。46はRLの縄文を地文とし、連弧文が施される。47は撚糸文を地文とする。48～54は集合沈線が施された資料である。48～51、54は隆帯上に刺突、列点、刻みが加わる。53はハの字状に沈線が施される。55は鏝付土器である。胎土に、大きなものでは5mm程の礫を多く含む。

56～59は称名寺Ⅱ式土器である。いずれも列点は看取されず、称名寺Ⅱ式終末期の所産であると思われる。58は口唇部文様帯をもち、刺突が施され、沈線が展開する。

60、61は底部資料である。60は台付き鉢である。底径4.8cmを測る。61は底径8.5cmを測る。

62、63は横刃型石器である。64は硬質の砂岩製の礫器である。65、66は打製石斧、67は剥片である。68は黒耀石の残核である。気泡を多量に含んでいる。

第2号住居跡（第7、8図）

炉跡と本住居跡に伴うと思われるピットが検出された。ピットの分布状況から、直径約7.2mの円形プランが推測される。炉は埋甕炉であるが、掘り方や焼土の分布範囲から、当初は地床炉であったものと思われる。本住居跡は出土土器から、加曾利Ⅱ式期の所産と考えられる。

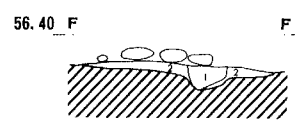
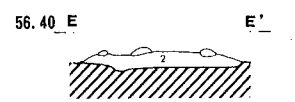
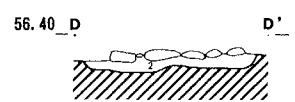
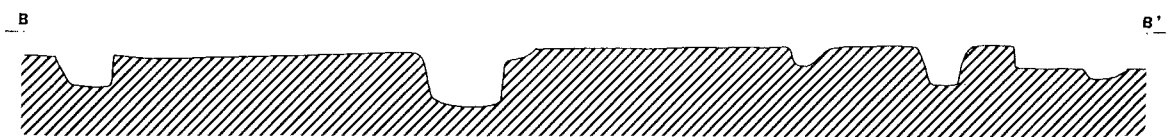
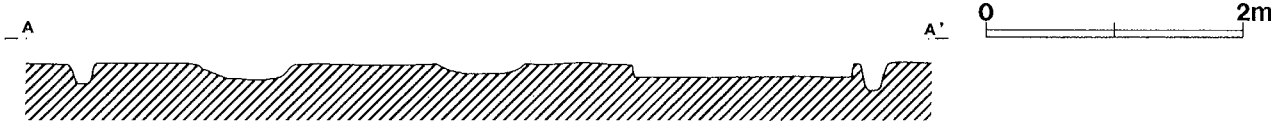
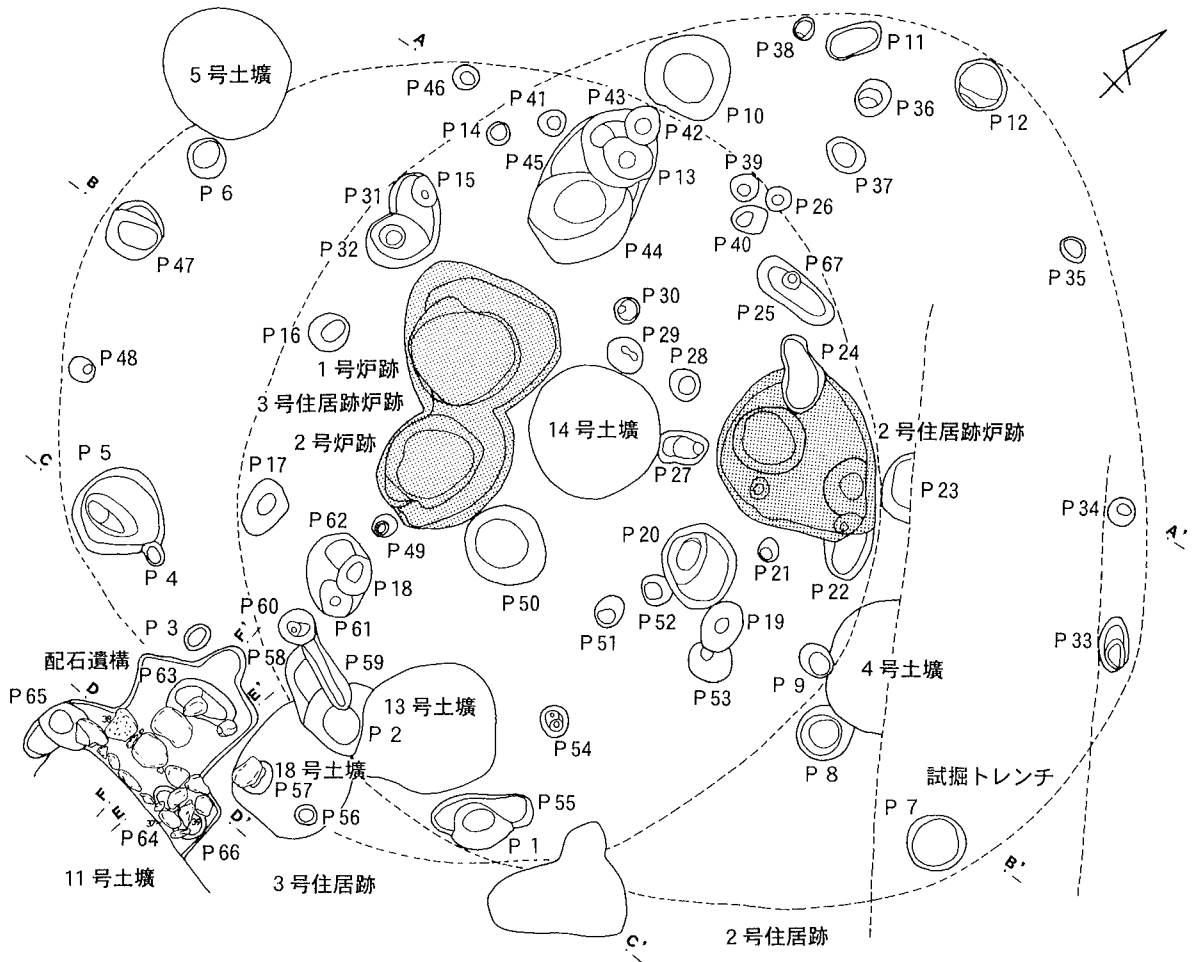
第2号住居跡出土遺物（第9図）

1は加曾利Ⅱ式の炉体土器である。口縁部は残念ながら、表土剥ぎの時点で欠損してしまった。最大径24cmを測る。口縁部文様帯と頸部無文帯が、明確には区画されない。口縁部には粘土が貼付され若干厚みが増えらる。文様は隆帯と沈線により、渦巻き文、窓枠状文が描かれる。窓枠状文の一部には、LRの縄文が充填される。頸部無文帯と胴部とは沈線で区画される。2は地文に条線が施され、隆帯が貼付される。3は無文の資料である。

第3号住居跡（第7、8図）

覆土は残っていないが、ピットの分布状況から、約6.8mの円形プランが推測される。2基の地床炉が確認された。これらを繋ぐように0.1m程周囲が掘り込まれている。1号炉跡は直径0.82m、2号炉跡は直径0.70mを測り、共に約0.45m、断面形態がほぼ方形に掘り込まれ、壁は焼けて硬化している。出土遺物は1号炉跡の方が多いが、遺存状態から同程度使用されたものと思われる。前後関係は不明であるが、併存した可能性が高い。本住居跡は出土土器から、堀之内Ⅰ式期の所産と考えられる。

また、住居跡の南側に隣接して配石遺構が確認された。南側の一部を第11号土壙に切られ、全容を把握できないが、方形を2つ繋いだような並べ方をしている。この中には、石皿が3点含まれていた。これらはいずれも南側の方形の隅に置かれており、その配置には意図的なものが感じられる。配石の下には10cm程のわずかな掘り込みが認められたのみである。伴出土器から本遺構の帰属性を裏付けることはできないが、位置関

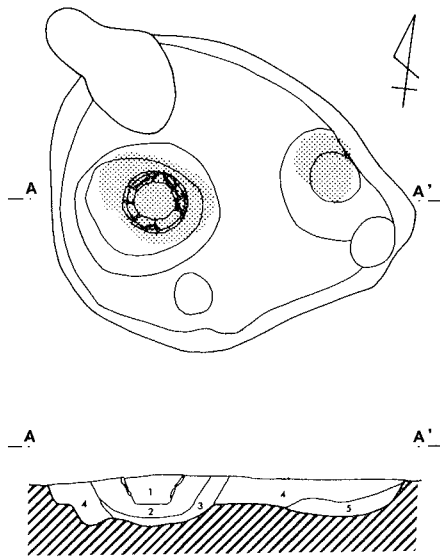


ピット深度 (cm)

P 1	45	P 11	6	P 21	11	P 31	9	P 41	14	P 51	12	P 61	30
P 2	25	P 12	36	P 22	7	P 32	34	P 42	32	P 52	3	P 62	33
P 3	22	P 13	29	P 23	18	P 33	18	P 43	14	P 53	16	P 63	19
P 4	20	P 14	12	P 24	29	P 34	24	P 44	28	P 54	20	P 64	13
P 5	31	P 15	13	P 25	6	P 35	6	P 45	3	P 55	17	P 65	20
P 6	18	P 16	21	P 26	14	P 36	13	P 46	15	P 56	16	P 66	15
P 7	26	P 17	52	P 27	17	P 37	19	P 47	24	P 57	20	P 67	16
P 8	32	P 18	53	P 28	23	P 38	12	P 48	—	P 58	7		
P 9	40	P 19	35	P 29	14	P 39	3	P 49	24	P 59	22		
P 10	38	P 20	39	P 30	12	P 40	13	P 50	6	P 60	24		

第3号住居跡配石遺構
 1層 暗褐色土 焼土粒をわずかに含む。
 2層 暗茶褐色土 ローム粒を含む。炭化粒を少し含む。

第7図 第2・3号住居跡実測図

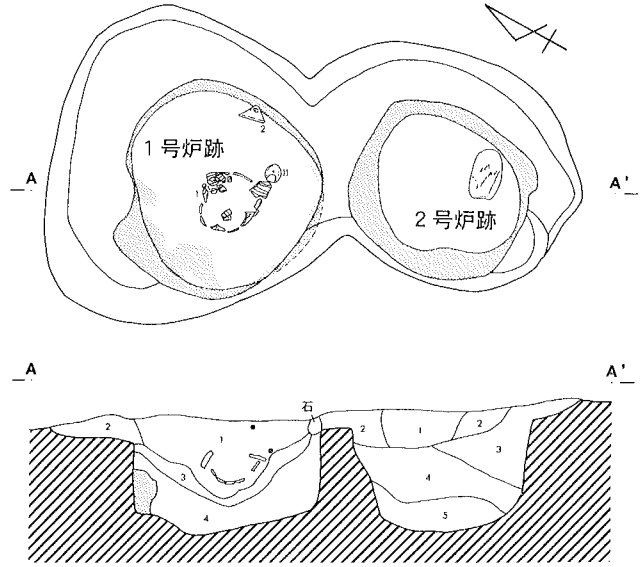


第2号住居跡炉跡

●●●●：焼土

第2号住居跡炉跡

- 1層 暗褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。
- 2層 橙褐色土 焼土層。炉体土器下面是硬化している。
- 3層 暗黄褐色土 焼土粒を含む。
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化粒を少し含む。
- 5層 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロックをやや多く含む。



第3号住居跡炉跡

●●●●：焼土硬化部

第3号住居跡炉跡

1号炉跡

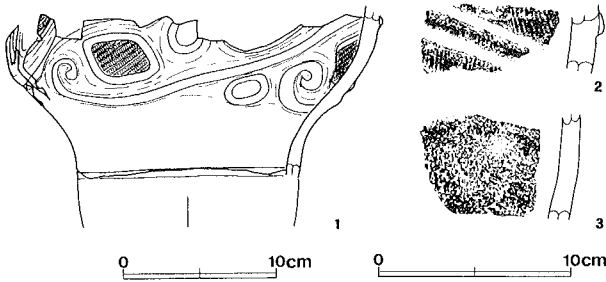
- 1層 暗褐色土 焼土粒をわずかに含む。
- 2層 暗茶褐色土 焼土粒・ローム粒をわずかに含む。
- 3層 明茶褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。
- 4層 橙褐色土 焼土粒・焼土ブロックを多量に含む。炭化粒を含む。

2号炉跡

- 1層 暗褐色土 焼土粒・ローム粒をわずかに含む。
- 2層 暗茶褐色土 焼土粒・焼土ブロックを少し含む。
- 3層 暗黄褐色土 焼土粒を多く含む。
- 4層 明茶褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。
- 5層 黒褐色土 焼土ブロックを少し含む。炭化粒を多く含む。



第8図 第2・3号住居跡炉跡実測図



第9図 第2号住居跡出土遺物

係より、3号住居跡に伴うものとした。

第3号住居跡出土遺物 (第10図)

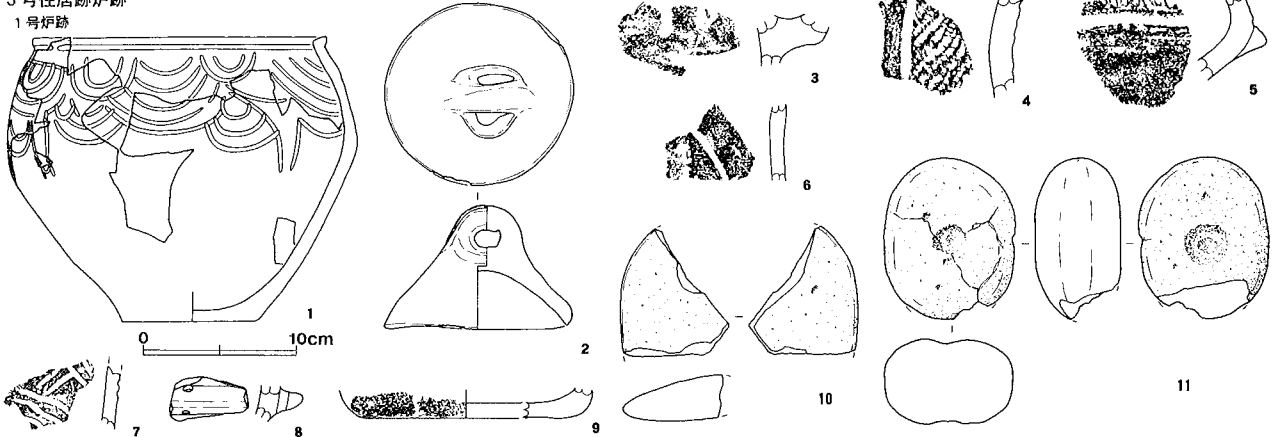
1~11は1号炉跡から出土した。1は鉢形土器である。器高18.7cm、最大径22.9cmを測る。角頭状の口唇部の下に、1条の沈線が巡ると思われる。胴部文様は、多条の沈線による弧線文が連なったものである。弧線文は所々で下に解放される。器面は荒れており、内面整形もやや雑である。胎土には1mm程の小礫を多く含

む。色調は褐色であるが、口縁部付近では還元し、灰色を呈する。2は蓋形土器である。器高6.6cm、直径9.6cmを測る。1、2とも堀之内1式中頃の所産であろう。3~5は加曾利E式土器である。3は把手部である。4はRLの縄文帯が施された胴部破片である。5は浅鉢の屈曲部である。屈曲上部には、集合沈線が縦に充填される。6は称名寺II式土器である。列点の有無は不明瞭である。7は堀之内1式土器である。地文に縄文が施され、多条の沈線でジグザグ文が描かれる。焼成は非常に良好である。8は有孔鋳付の鉢形土器であろう。9は底部資料である。10、11は磨石である。

12~15は2号炉跡出土である。12は中期中葉の所産である。焼成は良好で、交互刺突、押し引き文が施される。13~15は加曾利E式期の所産である。13は緩波状縁を有し、渦巻き文が描出される。14は指で横になぞり凹ませた内部に、列点が施される。Lの捺糸文を地

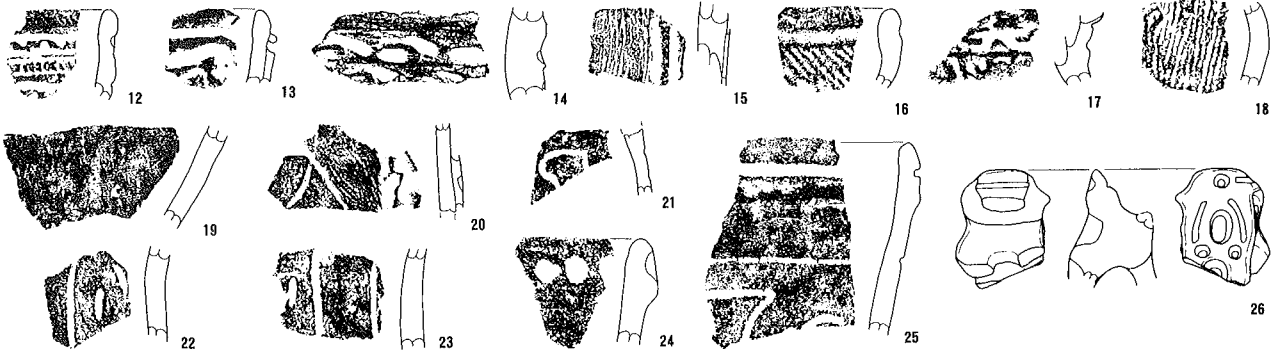
3号住居跡炉跡

1号炉跡

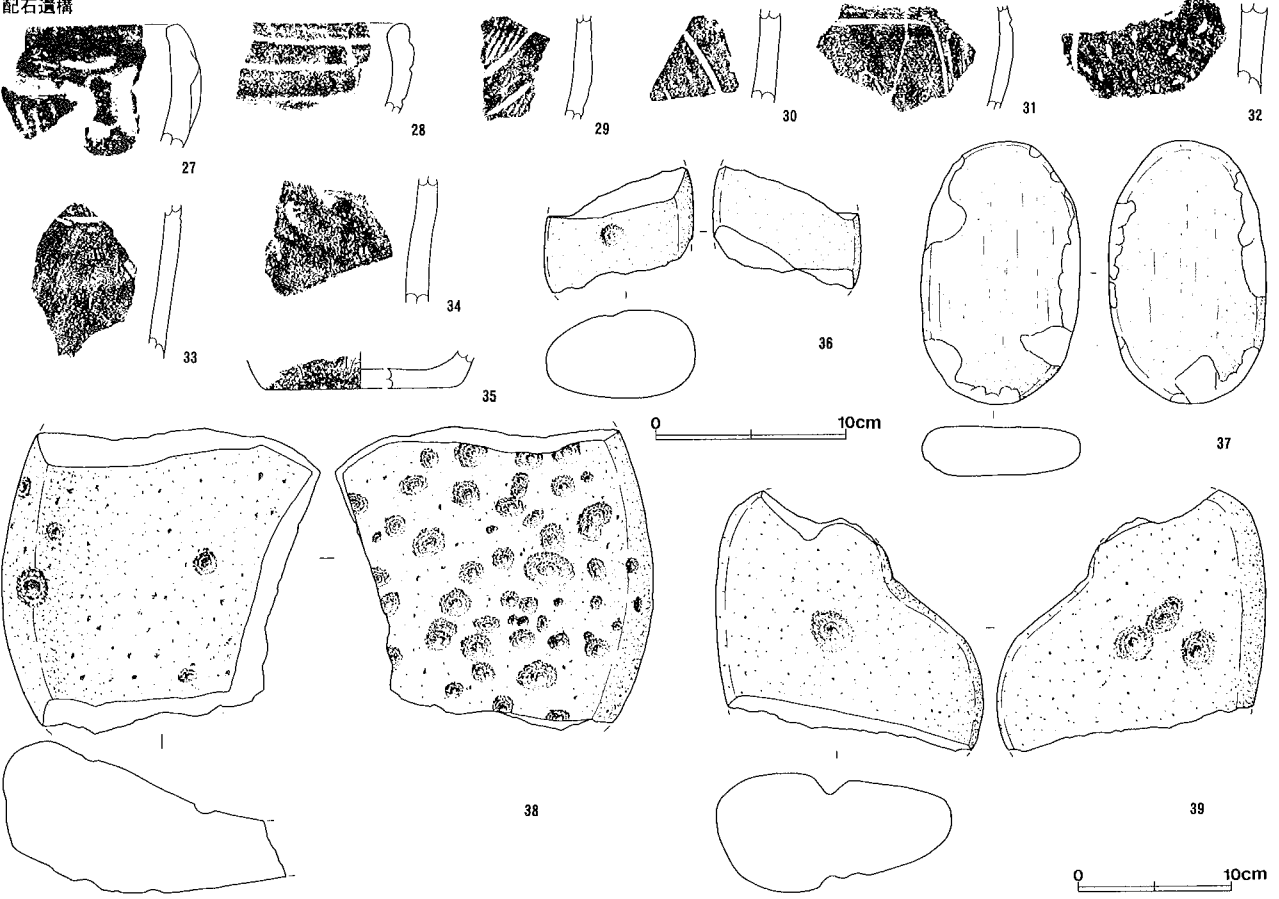


2号炉跡

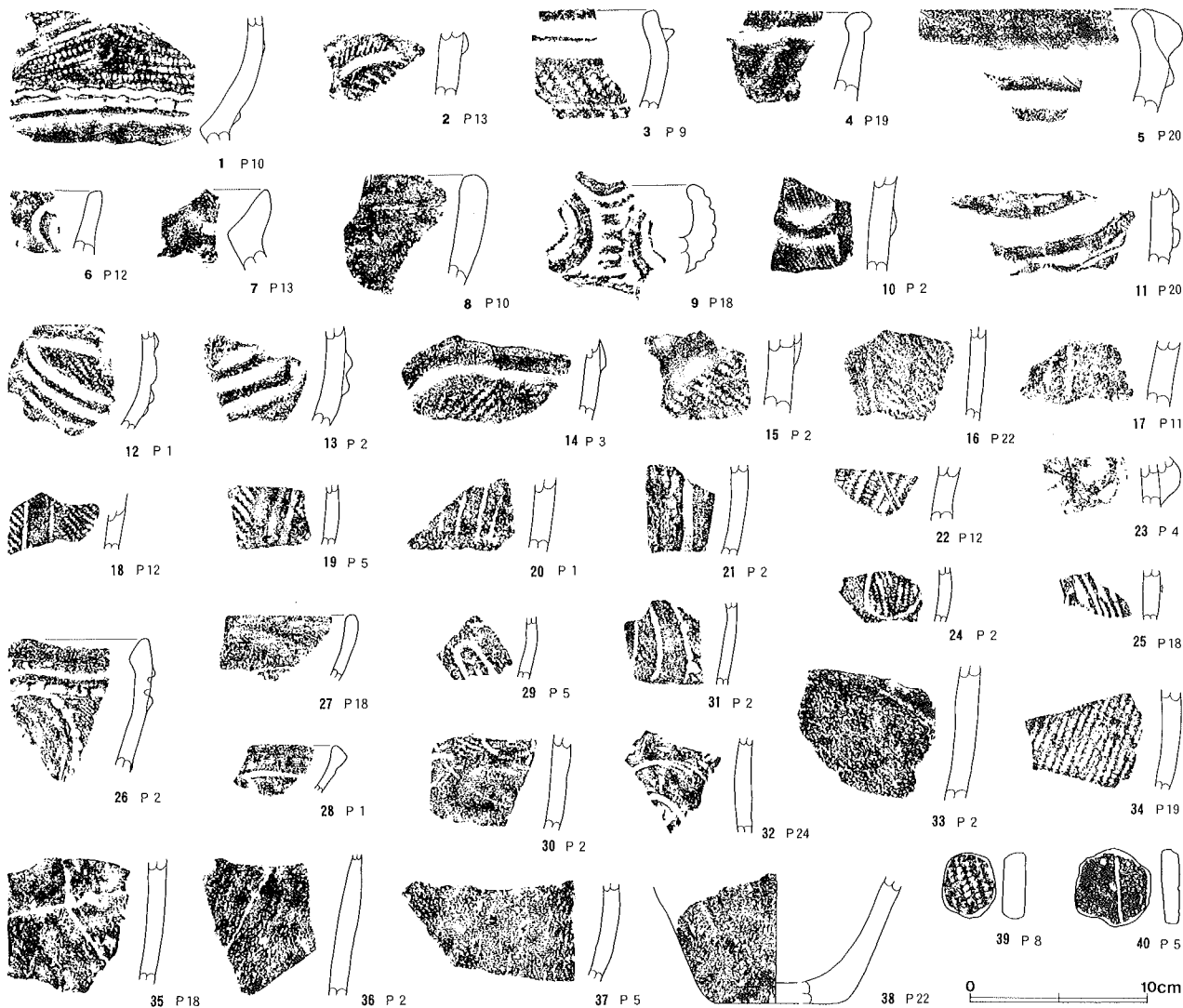
炉跡上部



配石遺構



第10图 第3号住居跡出土遺物



第11図 第2・3号住居跡ピット出土遺物

文とし、隆帯が垂下する。

16～26は、炉の上部から出土した資料である。16～19は加曾利E式期の所産である。16は横位に巡る沈線の下に、RLの縄文が施されるものである。17は括れ部に刺突が施される。18はRLの縄文を地文にする。細い隆帯が貼付されていた痕跡が、わずかに認められる。19は浅鉢の無文部である。20、21は称名寺I式土器である。20は有刻垂下隆帯が施される。22、23は列点が充填される称名寺II式土器である。24は口唇部に円形の刺突が施される。25は口唇部に沈線が巡り、充填文を持たない。24、25は称名寺II式終末期、或いは堀之内1式初頭に位置付けられよう。26は注口土器の把手部である。外側は大部分が剥がれており、沈線が

1条認められるのみである。両側面には刺突が、裏面には刺突連繫沈線文が施される。堀之内1式土器であろう。

27～39は配石遺構出土遺物である。27は加曾利E式土器の口縁部である。隆帯による区画内に、縦の集合沈線が施される。28～33は称名寺式土器である。28は丸みを帯びた口縁を持ち、沈線で文様が描かれる。器面の状態は悪く、充填文の有無は不明瞭である。29はLRの縄文が施される。31は微隆起線とそれに沿う沈線で、J字文と思われるモチーフが描出される。32はJ字文内部に細かい列点を多く充填させた土器である。33は底部付近の資料である。34は無文の土器、35は底部資料である。

36は磨石、37～39は石皿である。石皿は3点とも配石に使用されていた。

第2・3号住居跡ピット出土遺物（第11図）

1、2は中期中葉の所産である。1は口縁部文様帯と頸部無文帯を有する。区画には隆帯が用いられ、その上に結節沈線、波状沈線が沿う。縄文はRLが施文される。2は隆帯上が鋭く刻まれる。文様区画内には集合沈線が斜位に施される。

3～25は加曽利E式期の資料である。3は口辺部に高く張り出した隆帯が貼付される。地文はRLの縄文である。4は口唇を丸く肥厚させた、無文の口縁部である。6は沈線により、渦巻き文等が描かれると思われる。7、8は無文の口縁部である。7は突起部であり、内面に強い稜をもつ。9は把手部である。正面や側面は沈線で埋められる。10～15は隆帯が施された土器である。10はLRの縄文が施文される。そして隆帯によって、懸垂文とそこから展開するモチーフが描出される。12、14、15はRLの縄文が施文される。16～21は沈線による懸垂文が垂下する資料である。いずれも器面の状態が悪い。18、19はLRの縄文が施される。22はRLの縄文を地文とし、竹管状工具による平行沈線が施されたものである。23は隆帯上に沈線で渦巻き文が描かれる。24は波状文内にLRの縄文が充填される。25は隆帯に沿って集合沈線が施文される。

26～33は称名寺式土器である。26は細い隆帯によってJ字文が描出された土器である。隆帯に沿って深くえぐった円形刺突列が施文される。縄文はLRが使用される。29、32は列点、30、31はRLの縄文が充填される。33は胴下半の資料である。

34はRLの縄文が施される。35～37は無文の土器、38は無文の底部資料である。39、40は土製円盤である。39はRLの縄文を施文したものである。40は称名寺II式土器である。

2 土 壙

第1号土壙（第12図）

B-3・4グリッドに位置する。直径1.08mの円形土壙である。確認面からの深さは0.26mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土はローム粒、ロームブロックを多く含む黒褐色土である。

第1号土壙出土遺物（第14図）

1はRLの縄文が施文された胴部破片である。条がほぼ垂直である。2は条線が縦に、間隔を空けて施される。3は打製石斧である。自然面を残して、周縁部のみ調整が加えられる。

第2号土壙（第12図）

B-4グリッドに位置する。長径1.10mの楕円形を呈する。皿状に掘り込まれ、確認面からの深さは最深部で0.18mを測る。覆土は黒色土粒、ロームブロックを多く含む黒褐色土である。

第2号土壙出土遺物（第14図）

1は称名寺II式土器である。器壁が薄く、列点が施される。

第3号土壙（第12図）

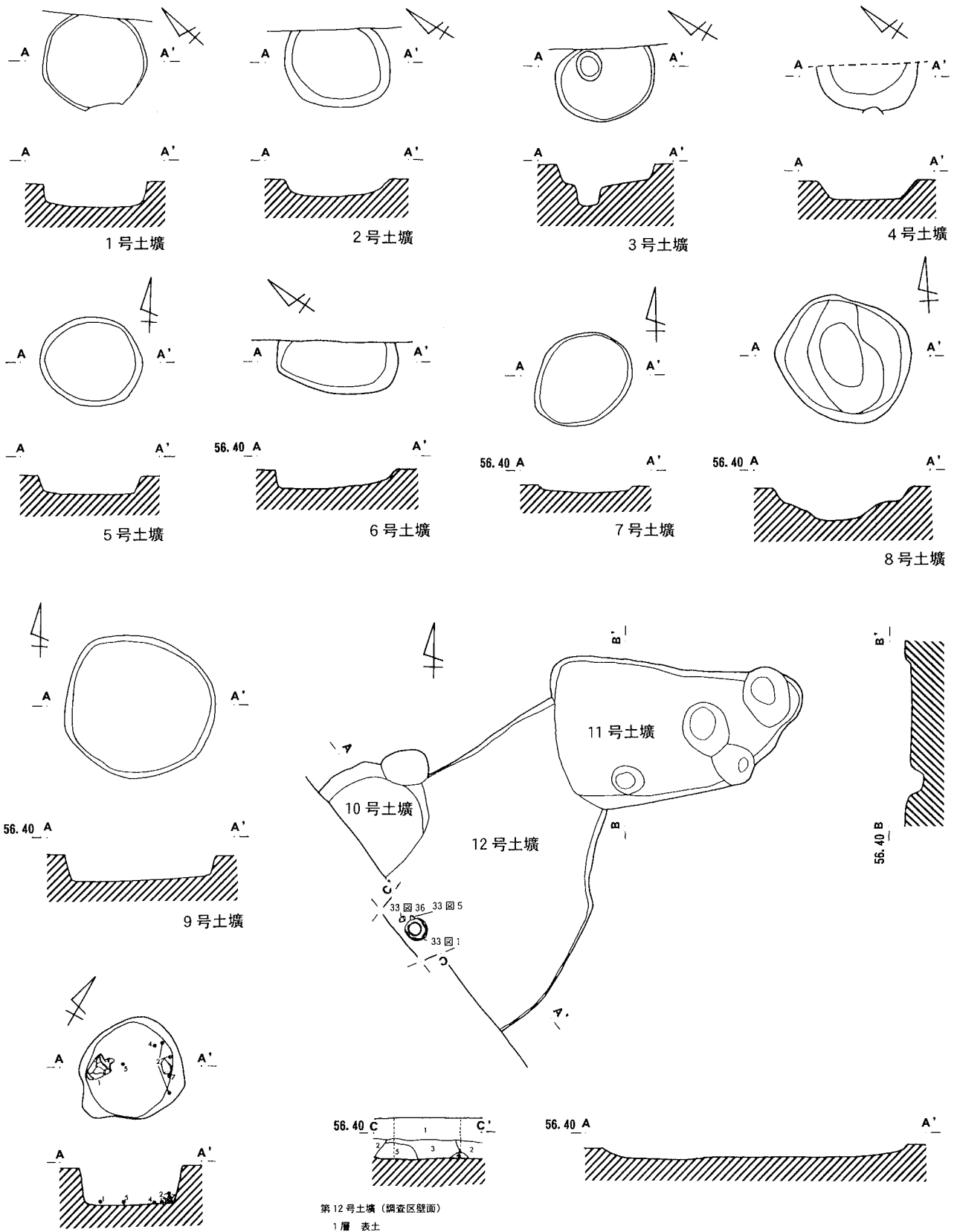
C-4グリッドに位置する。長径1.08mの楕円形を呈する。確認面からの深さは最深部で0.26mを測り、そこから更に0.18mの深さのピットが掘り込まれる。覆土はローム粒、ロームブロックを多く含む黒褐色土である。

第3号土壙出土遺物（第14図）

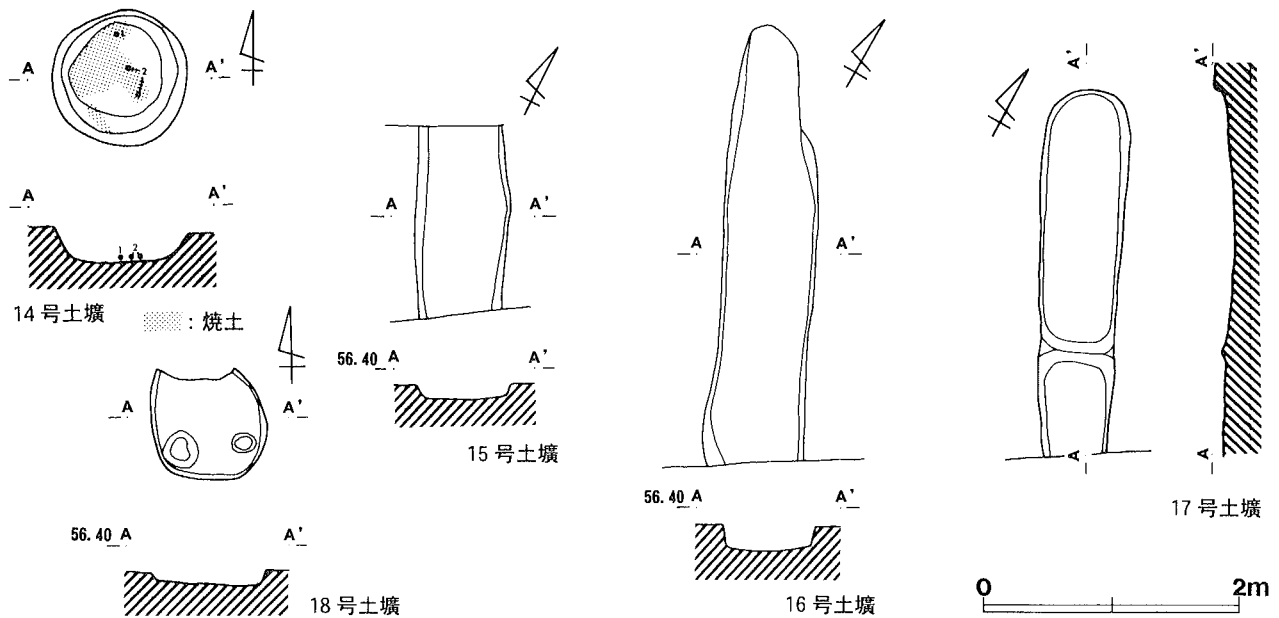
1は無文帯の下に、横位の沈線と刺突が施文される。

第4号土壙（第12図）

C-4グリッドに位置する。直径1.08m、確認面からの深さ0.21mを測る。片側半分は試掘調査の際に破壊されてしまったが、ほぼ円形のプランを有すると思われる。底面は平坦であり、壁はなだらかに立ち上がる。覆土はローム粒、ロームブロックを多く含む黒褐色土である。



第12図 土坑実測図(1)



第13図 土壌実測図(2)

第4号土壌出土遺物 (第14図)

1～6は加曾利E式土器である。1は交互刺突が施文された口縁部である。地文にLRの縄文が施される。2は微隆起線による区画の下に、RLの縄文が施される。3は連弧文土器である。Lの撚糸文が地文に施される。4は強く括れる部位に当たる。括れ部の外面には隆帯が貼付される。5は微隆起線とLRの縄文が施文された土器である。6は蕨手文が施文されたものである。縄文はRLが施される。

第5号土壌 (第12図)

C-2グリッドに位置する。平面形態は長径1.06m、短径0.94mの楕円形である。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは0.20mを測る。覆土はローム粒、ロームブロックを多く含み、また焼土粒、炭化粒を含む黒褐色土である。

第5号土壌出土遺物 (第14図)

1は加曾利E式土器である。一部に刺突が施された隆帯により、渦巻き文等が描出される。2は称名寺式土器である。隆帯が垂下し、その要所には円形刺突が施される。

第6号土壌 (第12図)

C-4・5、D-5グリッドに位置する。調査区壁

にかかるが、長径1.28mの楕円形を呈すると思われる。底面は北西に向かって低くなり、確認面からの深さは最深部で0.20mを測る。覆土はローム粒、焼土粒を少量含む暗茶褐色土である。

第6号土壌出土遺物 (第14図)

1は加曾利E式土器である。RLの縄文と隆帯による文様が施文される。

第7号土壌 (第12図)

D-3グリッドに位置する。長径1.10m、短径0.90mの楕円形である。掘り込みは浅く、確認面から0.08mである。

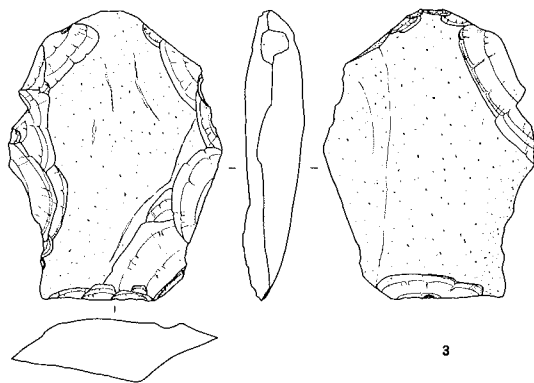
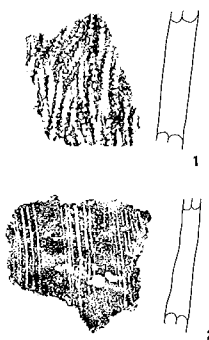
第8号土壌 (第12図)

D-3・4グリッドに位置する。直径1.44mの不整形円形を呈する。掘り込みは東西両側に1段テラスを有し、中央に向かって更に深くなる。確認面からの深さは最深部で0.36mを測る。

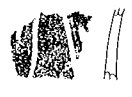
第8号土壌出土遺物 (第14図)

1、2は加曾利E式土器である。1はRLの縄文を地文にし、両脇を深くなぞった隆帯により文様が描かれる。2は浅鉢である。外面は縦に磨かれる。3、4は称名寺I式土器である。ともにLRの縄文が充填される。

1号土壤



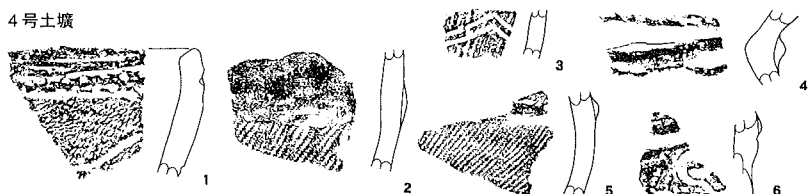
2号土壤



3号土壤



4号土壤



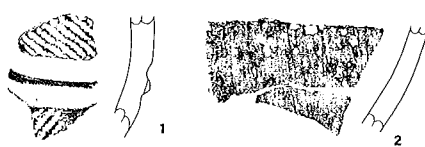
5号土壤



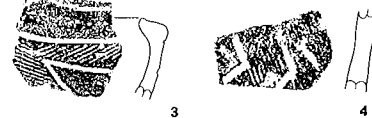
6号土壤



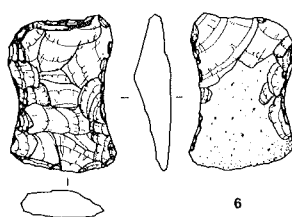
8号土壤



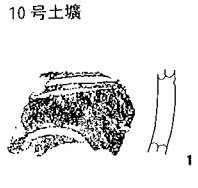
9号土壤



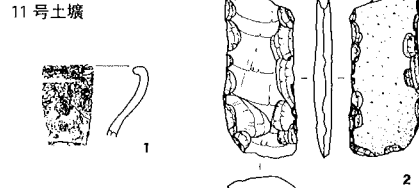
9号土壤



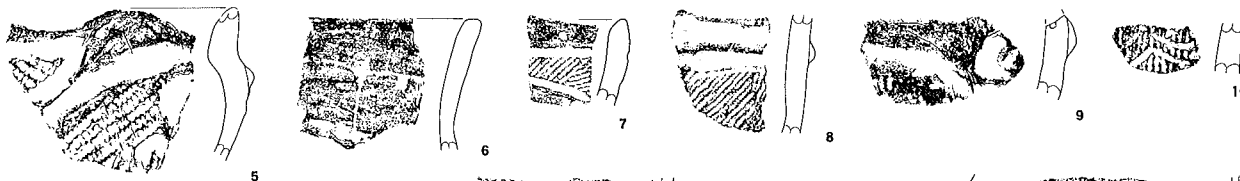
10号土壤



11号土壤



12号土壤



0 10cm

第14图 土壤出土遗物(1)

第9号土壌 (第12図)

D-2グリッドに位置する。直径1.56mの円形プランを有する。底面はほぼ平坦で、西側に向かって若干低くなる。確認面からの深さは最深部で0.28mを測る。

第9号土壌出土遺物 (第14図)

1～3は加曾利E式土器である。2は両耳壺の把手付近である。縄文はRLが施文される。3はLRの縄文帯が垂下するものである。4、5は称名寺II式土器である。ともに列点等は施されず、J字文等が描かれる。6、7は打製石斧である。

第10号土壌 (第12図)

D-2グリッドに位置する。第12号土壌より新しく、確認面からの深さは0.13mを測る。直径約1.20mの円形を呈すると思われる。覆土はロームブロックが多く、また炭化粒を含む黒褐色土である。

第10号土壌出土遺物 (第14図)

1は称名寺式土器であろう。沈線によりJ字文が描出されると思われる。

第11号土壌 (第12図)

D-3グリッドに位置する。第12号土壌と切り合い、配石遺構の南側を若干破壊していると思われる。確認面からの深さは0.07mを測る。平面形態は整っていない。底面からは4基のピットが検出された。覆土はロームブロックを多く含む黒褐色土である。

第11号土壌出土遺物 (第14図)

1は無文の口縁部である。器壁は薄く、小型の土器である。口唇部で強く内湾する。2は打製石斧である。

第12号土壌 (第12図)

D-3、E-3グリッドに位置する。底面は平坦で、確認面からの深さは0.10mを測る。平面形態は整っていない。調査区壁面からは図示したとおり、中期中葉中峠式期の伏甕(第33図1)が検出された。そのため、当初はこの土壌が住居跡である可能性も含めて調査を進めたが、出土遺物からその可能性は考えられなかった。伏甕は地山上に置かれ、3層と1層の境界まで納まり、それより上は1層の攪乱を受けている。土層観察の結果、伏甕は第12号土壌に伴うものではないと

判断できた。第12号土壌の覆土は、2層が該当するものと思われ、3～5層は伏甕を包含する遺構の覆土である可能性がある。伏甕は、周囲を攪乱を受けながらも、かろうじて攪乱を免れたものであると考えられる。

第12号土壌出土遺物 (第14、15図)

1～4は中期中葉の所産である。1は突起であり、方向の異なる2つの把手が上下に連結した形態をとる。側面、背面には鋭い刻みや結節沈線が施文される。2は三叉文が施文されたものである。三叉文の周囲や隆帯上に施される刻みは鋭く細かい。3は強く内湾する口辺部資料である。太い刻みや沈線を施した隆帯により文様を描くが、多くは剥落している。4は隆帯上とその下とをハの字に刻む。5～17は中期後葉から後期初頭の土器である。5は小突起を持つ。窓枠状の区画内にはLRの縄文が施文される。6は両耳壺の口縁部であろう。7は小突起を有し、LRの縄文が充填される。8は微隆起線により区画され、RLの縄文が施される。9は口縁部の窓枠状区画部分である。上部は輪積み痕が明瞭に残り、棒状工具で刺突を連ね、粘土紐同士の接着を強化しようとしている。10は連弧文土器である。地文にはLの撚糸文が施される。11は条線を地文とし、懸垂文が垂下する。12は中にRLの縄文を充填させた∩字文が描かれる。13はLRの縄文が施文される。14は無文の浅鉢である。15は条線が波状に施された土器である。16は小把手を有し、玉抱き波状文と∧字文が描かれる土器である。文様意匠内にはLRの縄文が充填される。17は波状文と∧字文が描かれる。文様は一部で渦を巻くと思われる。意匠内にはLRの縄文が充填される。18～20は打製石斧である。

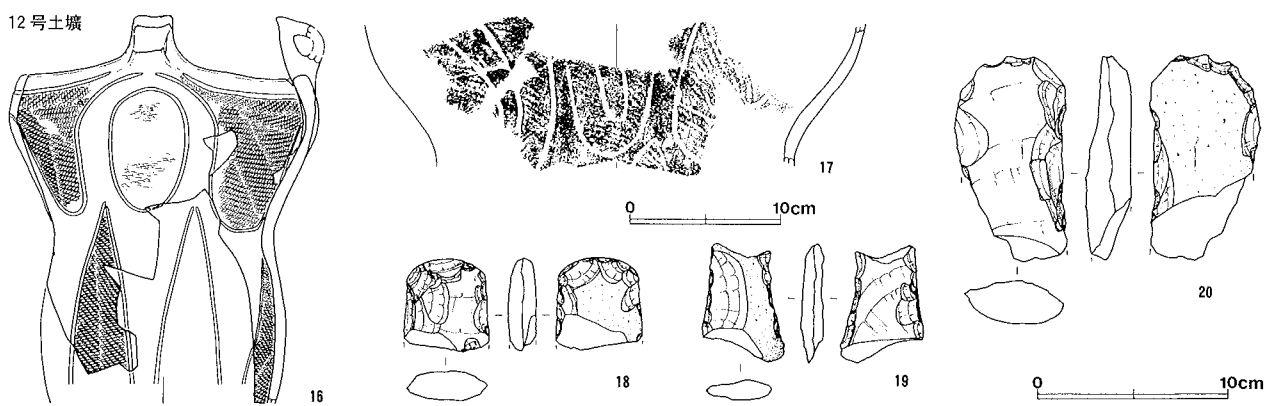
第13号土壌 (第12図)

C-3、D-3グリッドに位置する。直径1.08m、確認面からの深さは0.40mを測り、ほぼ円形を呈する。底面はほぼ平坦である。覆土は焼土粒を含む暗茶褐色土である。遺物は底面付近に集中し、一括性が高い。出土土器から、中峠式期の所産と考えられる。

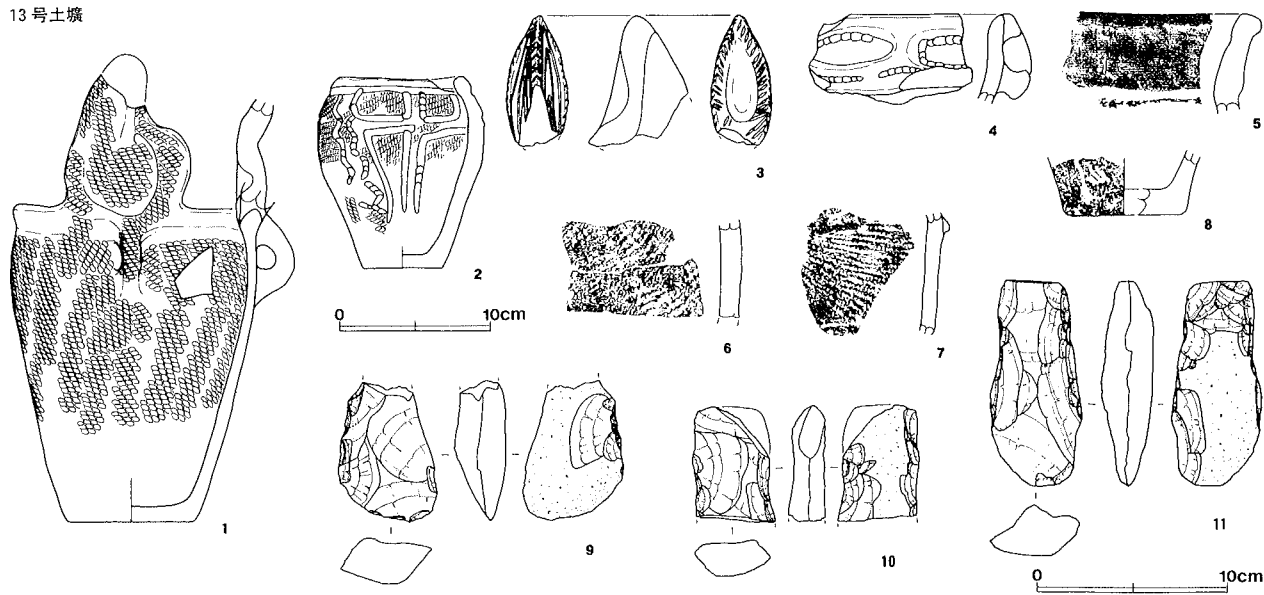
第13号土壌出土遺物 (第15図)

1～8は中峠式段階の土器である。1はバケツ形の

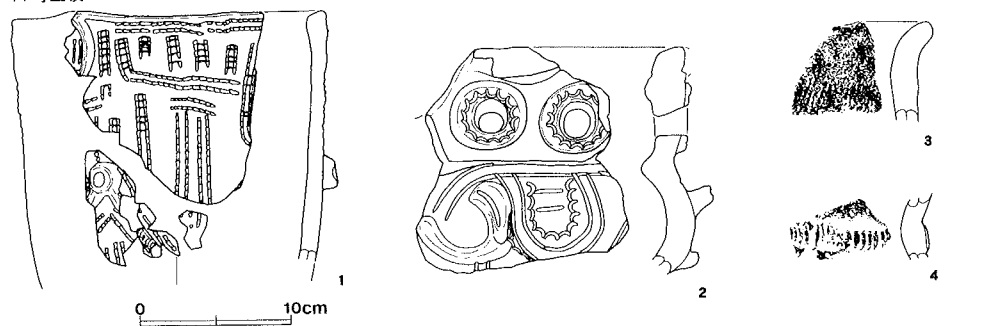
12号土坑



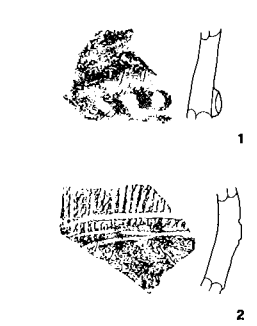
13号土坑



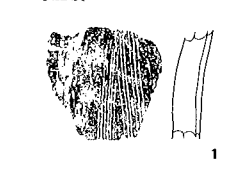
14号土坑



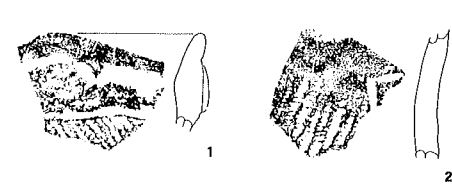
15号土坑



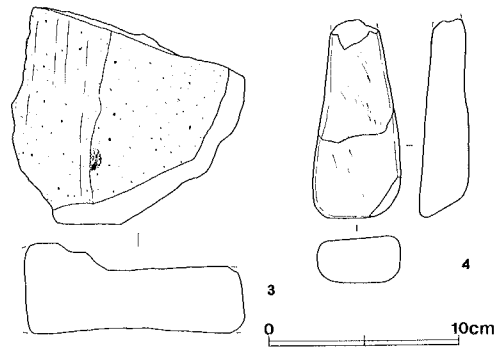
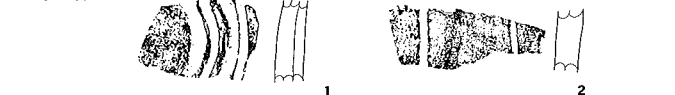
16号土坑



17号土坑



18号土坑



第15图 土坑出土遗物(2)

器形を呈し、口径16cm、器高21cmを測る。阿玉台式系統の大突起と把手が付く。大突起の対面には小突起が付く。全面にLRの縄文が施文される。2は口縁部が内湾する小型土器である。口径8cm、器高12.7cmを測る。口縁下に沈線が巡り、部分的に結節する沈線により、方形区画や波状懸垂文等が描かれる。地文にLRの縄文が施文される。3は突起である。稜線に刻みが施される。4は隆帯上、隆帯脇に結節沈線が施される。胎土に白色砂粒を多量に含む。5は無文帯がやや肥厚し、その下に縄文が施される。6、8はLR、7はRLの縄文が施文される。9～11は打製石斧である。

第14号土壙 (第13図)

C-3グリッドに位置する。直径1.04mの円形土壙である。壁は比較的なだらかに立ち上がり、確認面からの深さは0.29mを測る。覆土は焼土粒、炭化粒を含む暗茶褐色土である。底面付近にはブロック状になったものを含む焼土が薄く分布していた。遺物は底面付近に集中し、一括性が高いと思われる。出土土器から、中峠式期の所産と考えられる。

第14号土壙出土遺物 (第15図)

1～4は中峠式段階の土器であると考えられる。1はバケツ形の器形を呈する。竹管状工具による結節平行沈線で、口辺部の方形区画文や懸垂文等が描かれる。口縁下には弧状の隆帯が貼付される。胴部には、中央を凹ませた円形の貼り付け文が施され、そこを起点として左右に、有刻隆帯が展開する。胎土は緻密で、焼成は良好である。2は口縁部で内湾し、直立する突起をもつものである。突起には、中央が貫通する2つの円形貼り付けが施される。貼り付け上には、竹管状工具による刺突が連続する。口縁部には、上部が1段高くなる隆帯がJ字状に貼付され、上部の隆帯上には沈線が施される。また、突起部と同様の工具による平行沈線、刺突でU字状文等が描出される。3はやや外反する口縁部である。縄文が施文される。4は屈曲部に有刻隆帯が貼付されたものである。

第15号土壙 (第13図)

D-4・5グリッドに位置する。先端部が試掘調査

時に破壊されてしまったが、溝状の土壙と思われる。幅は0.73m、確認面からの深さは0.12mを測る。覆土はローム粒、ロームブロックを多く含む黒褐色土である。

第15号土壙出土遺物 (第15図)

1は太めの刺突が施された隆帯が貼付される。2はLの撚糸文が地文に施されたものである。

第16号土壙 (第13図)

D-4グリッドに位置する。幅0.73mの溝状土壙である。先端に行くにしたがって徐々に浅くなる。確認面からの深さは最深部で0.20mを測る。覆土はローム粒、ロームブロックを多く含む黒褐色土である。

第16号土壙出土遺物 (第15図)

1は条線が地文に施され、隆帯が垂下する。

第17号土壙 (第13図)

D-4グリッドに位置する。幅0.64mの溝状土壙である。先端から2.08mの所でわずかに立ち上がり、再び落ち込むため、2基の長方形の土壙が重複している可能性もある。確認面からの深さは最深部で0.16mを測る。覆土はローム粒、ロームブロックを多く含む黒褐色土である。

第17号土壙出土遺物 (第15図)

1は小突起を有する。口縁部文様帯が上に押し上げられた感がある。口縁部の隆帯が剥落し、文様は不明瞭である。縄文はLRが使用される。2はRLの縄文が施文される。3は石皿の残片、4は砥石である。

第18号土壙 (第13図)

D-3グリッドに位置する。直径0.90mの円形を呈する。底面は東側に向かって少し低くなり、確認面からの深さは最深部で0.12mを測る。上部に配石遺構の一部が重なる。

第18号土壙出土遺物 (第15図)

1、2は称名寺式土器である。1は沈線により2分された隆帯が弧を描いて貼付される。

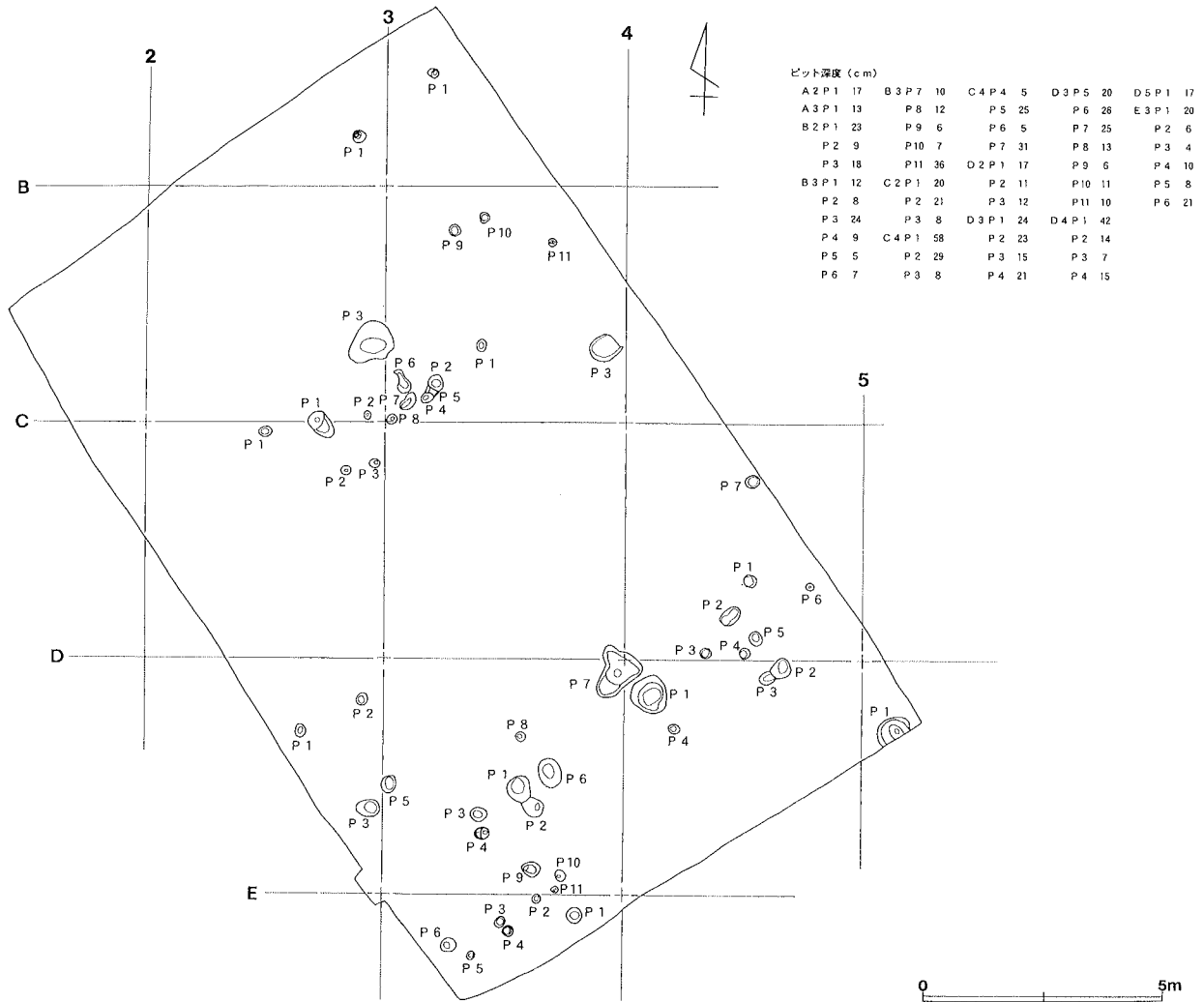
3 ピット群

遺構に伴わない単独のものとしてとらえられたピットは、全部で51基検出された。実測図および深度は第16図に示した。この中でD-3・4、E-3グリッドに集中するピット群は、調査区壁際で出土した伏甕

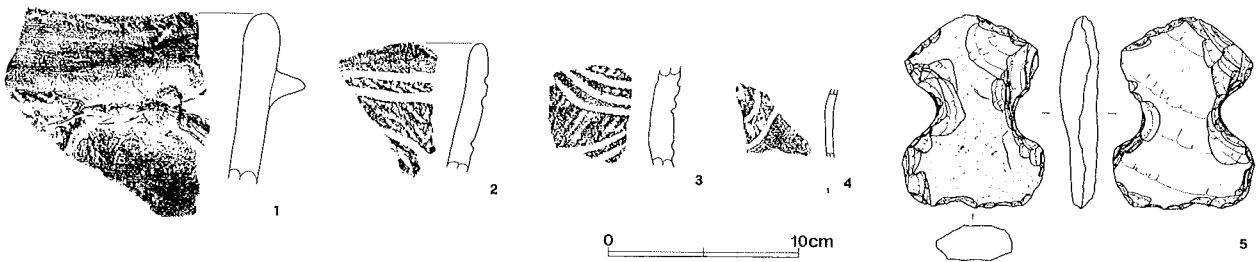
(第33図1)を囲むように円形に巡っている。第12号土壌の文中において述べた、伏甕を包含する遺構に伴うピットである可能性がある。この遺構は、ピットの配列や伏甕という特異な遺物の出土から、中峠式期の住居跡としても考えるものである。

ピット出土遺物 (第17図)

1はD3P4出土で、後期初頭の所産である。微隆



第16図 ピット群実測図



第17図 ピット出土遺物

起線による懸垂文が施される。口縁下の区画線は部分的に舌状に盛り上がる。

2はD5P1出土の加曾利E式土器である。地文にRLの縄文が施文される。

3～5はD3P6出土である。3は加曾利E式土器である。地文に縄文を施し、3本単位の沈線で文様が描かれる。4は称名寺I式土器である。文様内にはLRの縄文が充填される。5は分銅形の打製石斧である。

4 埋没谷

調査区の北西部で検出され、河川跡と考えられる(第18、19図)。第3、5次調査で検出された、南北に蛇行する谷に連続する。これまでの調査例から、幅は5、6m強と思われる。第1号住居跡を一部侵食し、南西部は攪乱を受ける。底面は徐々に深くなり、確認面からの深さは最深部で0.84mを測る。遺物はほぼ全面に分布し、大部分はこれまでの調査と同様に、底面付近に無遺物層が存在し、その上に遺物が認められる。しかしB-2グリッド南西部には、大形の破片や復元個体が多数出土する土器集中地点があり、ここでは無遺物層をもたない。またこの地点には、人頭大の礫も多く認められた。遺物の分布状況から、今回の調査区部分に関しては、称名寺II式期にほぼ埋没が完了していると考えられる。

埋没谷出土遺物(第20～32図)

埋没谷出土土器については、9群に分類した。以下、群ごとに述べていく。

第1群土器(第23図31)

黒浜式に比定される。胎土に繊維を含み、棒状工具により、短沈線が連続して施文される。

第2群土器(第23図32、33)

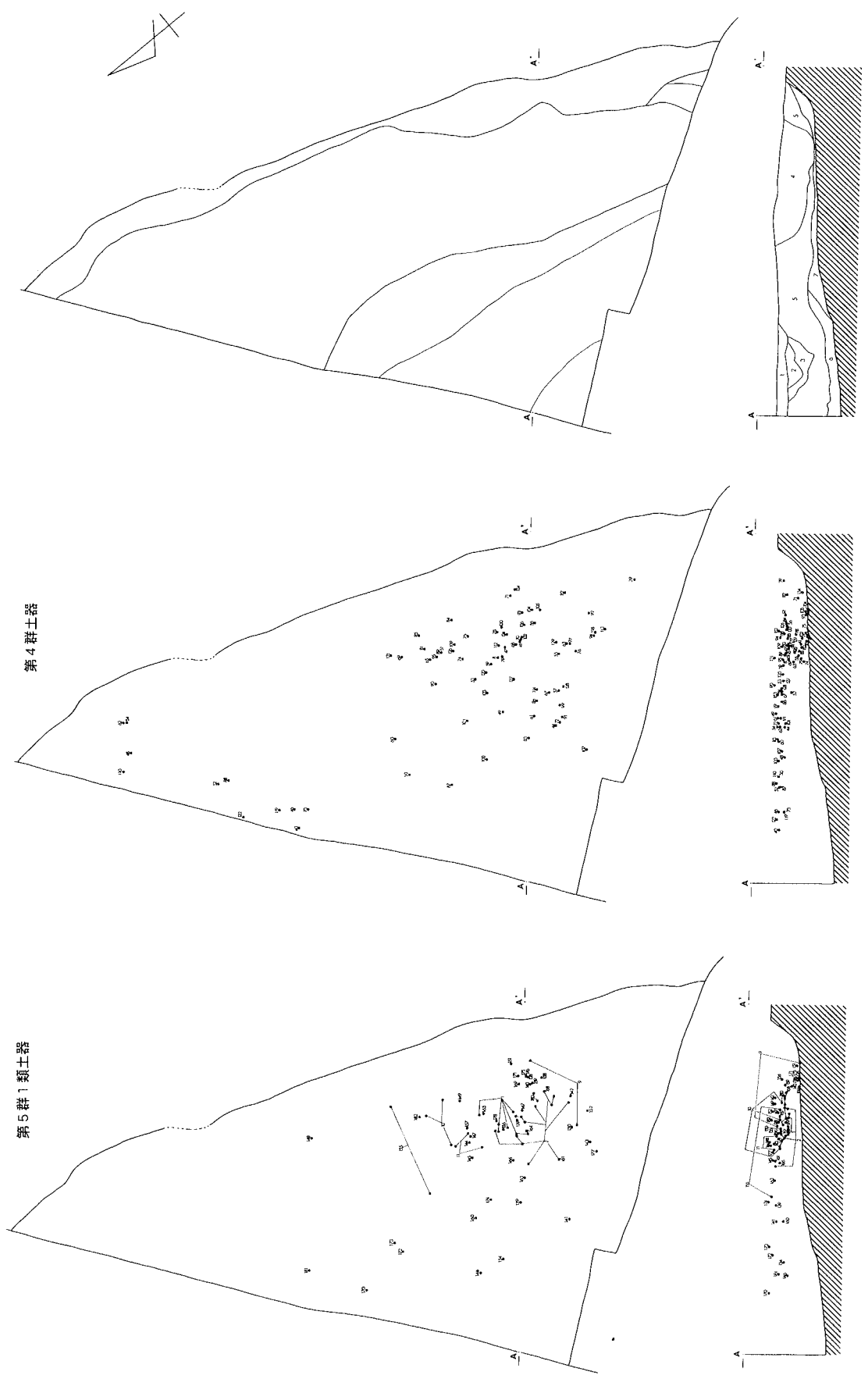
諸磯式に比定される。32は諸磯b式土器である。RL縄文を地文にし、有刻浮線文が施文される。33は2単位の山形突起をもつ浅鉢であろう。外面に比べて内面整形はやや雑である。

第3群土器(第23図34～37)

中期中葉の所産である。34は口唇が肥厚し、隆帯が垂下する。35、36は有刻隆帯が施文される。36の区画下には縄文が施文される。37は口縁部文様帯の隆帯上に結節沈線が施される。地文にはRLの縄文が施文される。

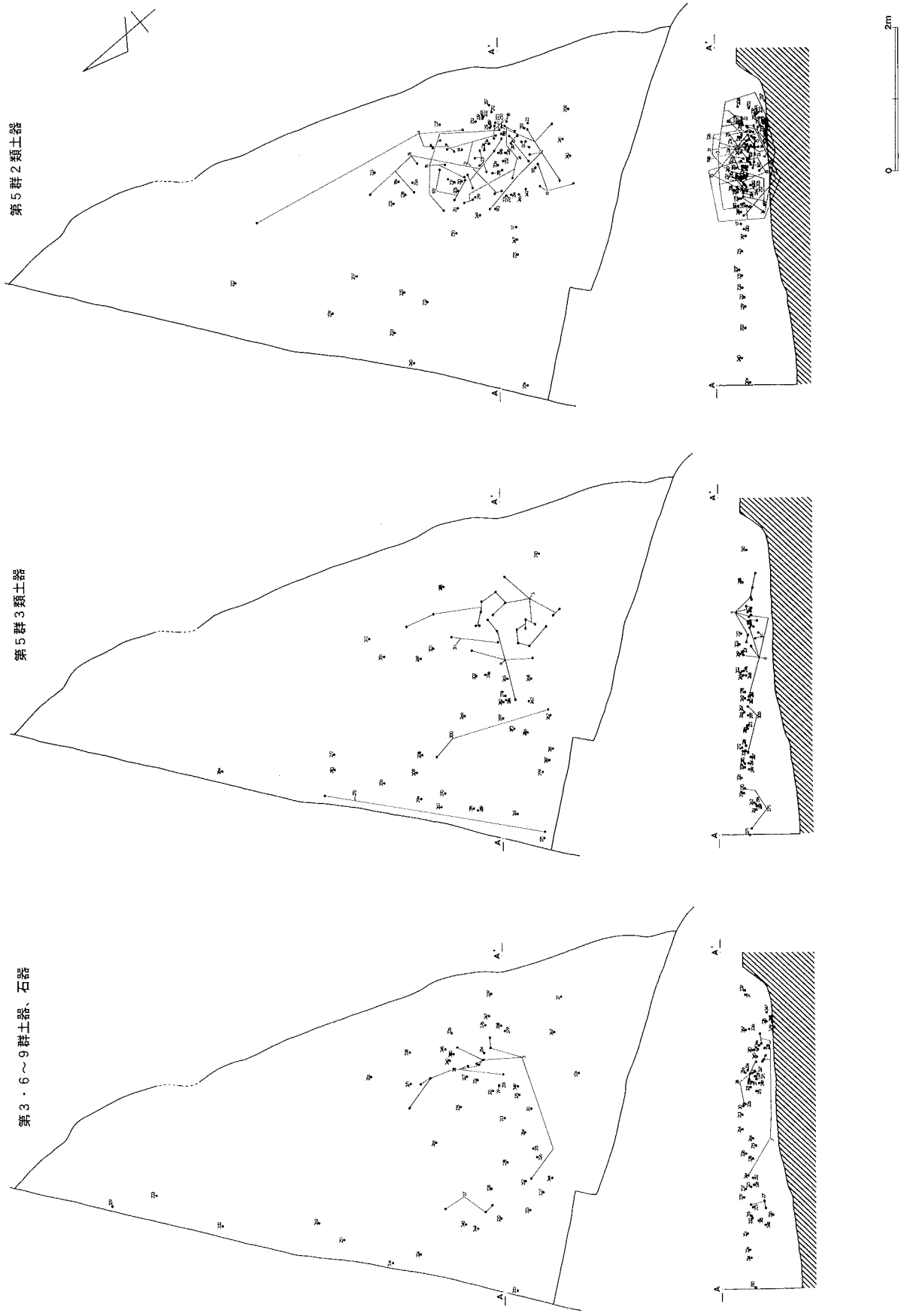
第4群土器(第21図8、第23図38～第25図134)

中期後葉の所産である。8は口縁が内湾する浅鉢である。内外面とも横位に丁寧に磨かれる。38は外反する口縁部である。口唇に沈線が巡り、Lの撚糸文が施文される。39は角頭状の口唇をもつ。無文帯の下は沈線で区画される。40は小突起部である。41は口縁部付近の資料である。隆帯による張り出し上に、渦巻き文が施される。縄文はRLが施文される。42～48は口縁部に渦巻き文が施文された土器である。42、45、47はRLの縄文、46は条線が施文される。49は浅鉢である。50は蕨手文とRL縄文が施文される。51はRL縄文と、沈線による懸垂文が施文される。52～54は頸部無文帯であろう。54はRLの縄文が施文される。55～63は窓枠状の区画が施された土器である。55、58、59、62はRL、56、61はLRの縄文が施される。また、62は蕨手状の懸垂文が垂下する。64は口縁下に隆帯が巡る。縄文はRLが施文される。65は隆帯で区画された無文帯の下に、RLの縄文が施文された土器である。66～68は胴部に隆帯が垂下するものである。66はLの撚糸文を地文にする。67、68はRLの縄文が施文される。69～74は波状沈線文が垂下する土器である。69、70、72、73はRL、71はLR、74は無節Lの縄文が施文される。75～96は無文帯と縄文帯が交互に垂下する土器である。75～77は、無文帯の中に沈線が1条付加される。76、95は無節L、77～81、84～86、88、89、91、92はRL、82、83、90、93、94、96はLRの縄文が施文される。97、98は底部資料であり、沈線が垂下する。ともにRLの縄文が施される。99は条線が施されたものである。100は縄文を地文とし、竹管状工具により平行沈線が施される。101は無節Lを地文とし、∩字懸垂文等が施される。102は2本組の隆帯が襷状に交

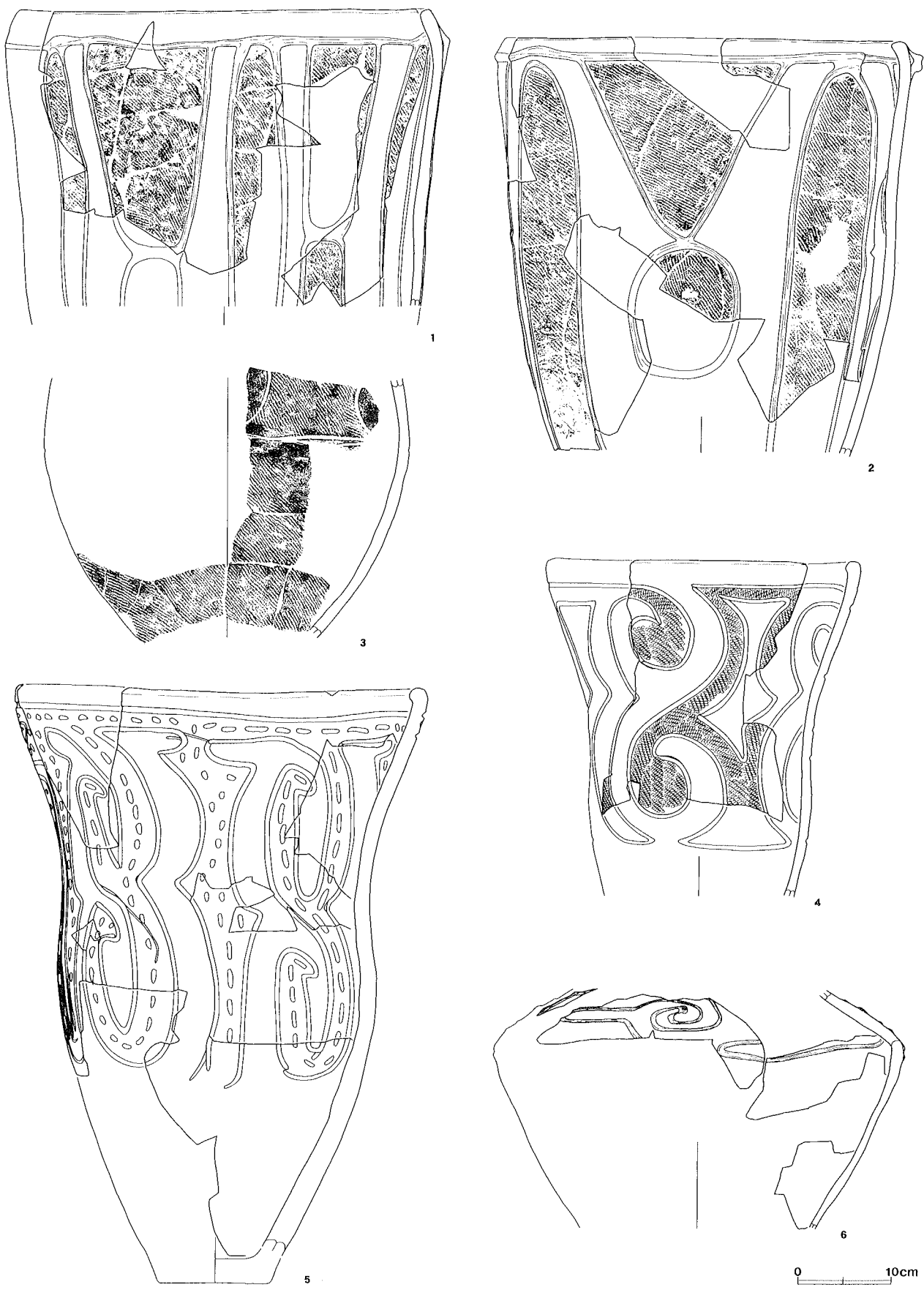


- 埋没谷
- 1層 暗褐色土 粘土質を含む。
 - 2層 暗褐色土 ローム状を多く含む。
 - 3層 暗褐色土 ローム状を多く含む。
 - 4層 暗褐色土 土路片、暗褐色土を含む。
 - 5層 暗褐色土 ローム状、粘土質を含む。
 - 6層 暗褐色土 ローム状、ロームブロックを含む。
 - 7層 暗褐色土 ローム状を多く含む。

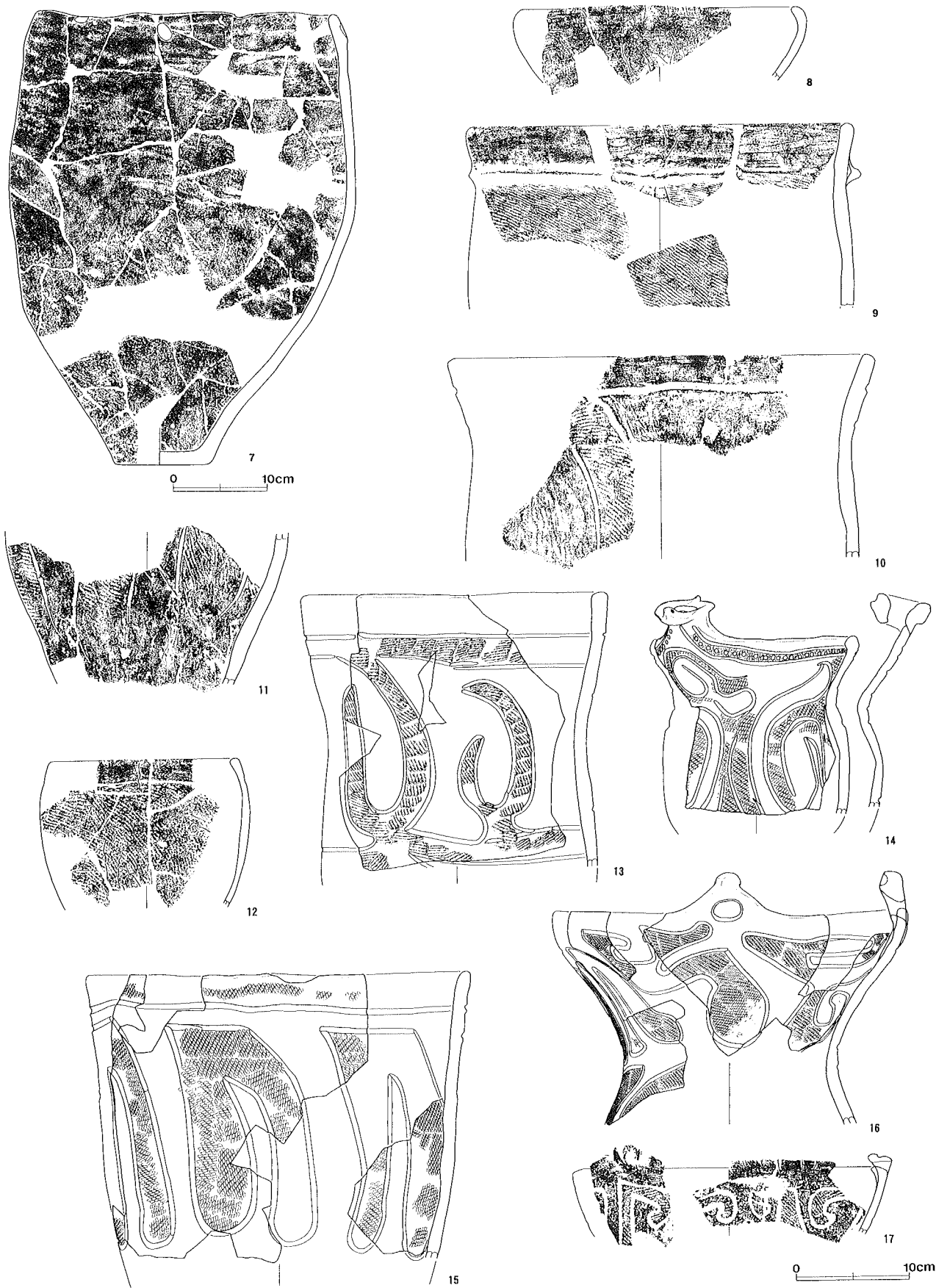
第18図 埋没谷実測図および遺物分布図(1)



第19図 埋没谷遺物分布図(2)



第 20 図 埋没谷出土遺物 (1)



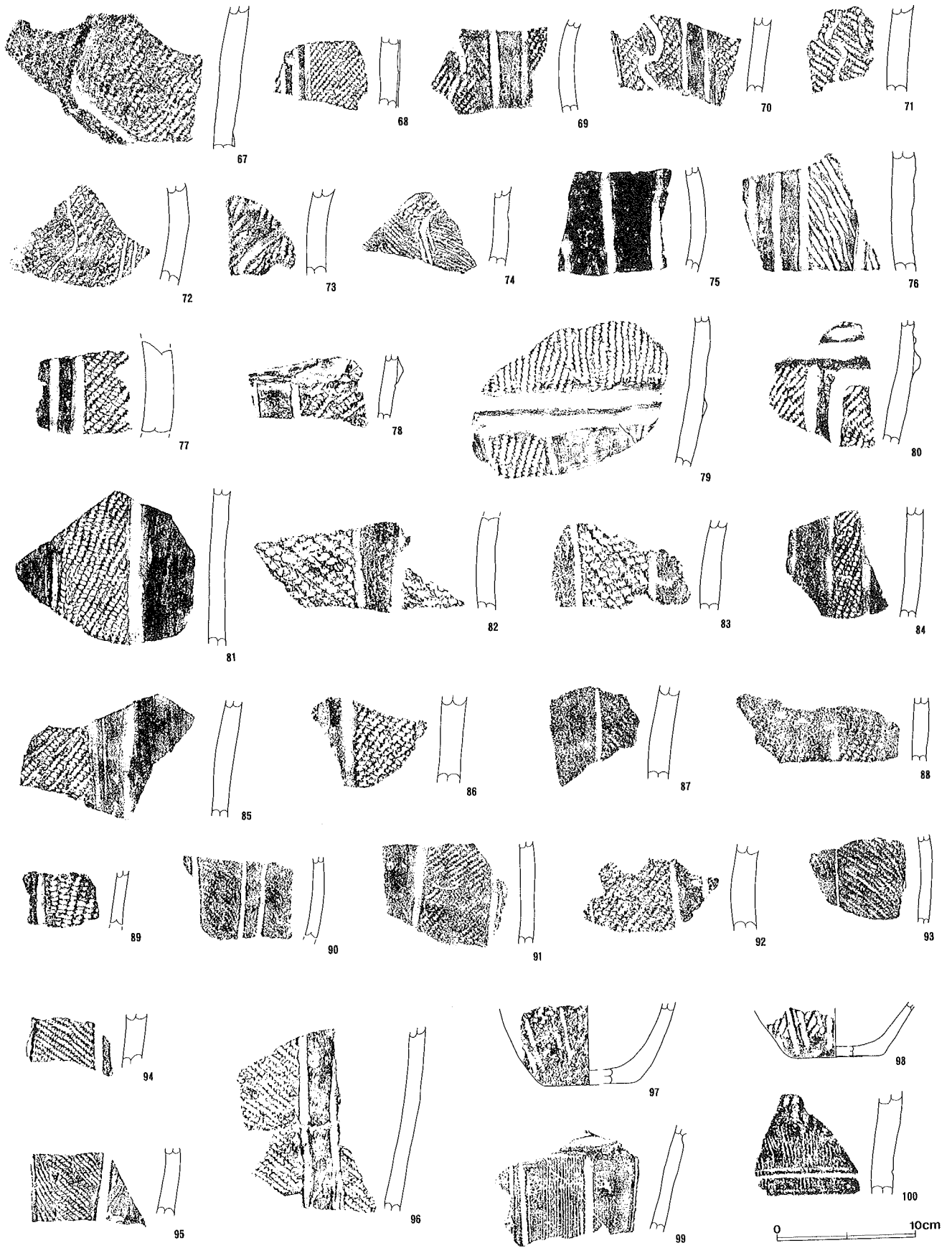
第 21 图 埋没谷出土遺物(2)



第 22 图 埋没谷出土遺物 (3)



第 23 图 埋没谷出土遺物 (4)



第 24 图 埋没谷出土遺物 (5)

わる部分に、円形の凹文が施される。縄文はRLが施文される。103、104は屈曲部である。交互刺突、刻みが施される。105～109は口縁部文様の区画内に、集合沈線が充填された土器である。109はRLの縄文が施文される。110～114は隆帯により分割された文様内に集合沈線が充填される。108は口縁の内側に強い稜を有する。114は放射状に施文される。115は矢羽状沈線が施される。116は斜行沈線帯の下に、RLの縄文が施文される。117、118は区画内に刺突が施された土器である。119、120は隆帯が垂下する。短沈線、条線を地文とする。121は内湾する口縁部で、重弧文が描かれる。122、123は口縁部下に刺突列が施される。123は〇字懸垂文とRL縄文が施される。124～127は所謂梶山類である。隆帯による大柄渦巻き文が描かれる。124、127はRL、125、126はLRの縄文が施文される。128～132は地文のみ施文された資料である。128は無節L、129～132はLR縄文が施文される。133、134は浅鉢である。

第5群土器 (第20図1～第21図7、第21図9～第22図26、第26図135～第30図312、317)

後期初頭と思われる土器を一括した。

第1類 (第20図1、2、第21図9～12、第26図135～第27図182)

加曾利E式系統の土器である。

a種 (135、136)

波状口縁を呈するものである。胴部にはやや先端の尖った〇字文が垂下する。135はRL、136はLRの縄文が施文される。

b種 (10～12、137～142)

口縁部無文帯下を区画し、胴部に〇字文が沈線によって描かれたものである。口縁部下の区画は、141、142は微隆起線によって、その他のものは沈線により行われる。10は、縄文施文部と無文部が反転した印象を受ける。群馬県熊野谷J-1号住居例に類似する。139はRL、それ以外はLRの縄文が施文される。

c種 (1、2、9、143～182)

微隆起線により文様が描かれるものである。1はH

字文と小突起を起点とする〇字文が、交互に垂下する。2は口径21.4cmを測る。1とほぼ同様の文様構成だが、H字文下端は閉じられ、円形になると思われる。151は大柄渦巻き文が描出され、起点には中央が凹んだ円形の貼り付け文が施される。1、2、9、144、159、161、163、164、166～168、170、173、179はLR、156～158、162、165、169、172、174、176、178はRL、175、180は無節Lの縄文が施文される。181、182は縄文が認められず、181は平行沈線が雑に施される。

第2類 (第20図3、4、第21図13～第22図25、第27図183～第29図259、第30図317)

充填文に縄文が用いられた土器である。全て称名寺I式土器として扱った。

a種 (3、13、205)

J字文下端の横位連繫帯を有するものである。3はやや変則的だが、この類の範疇に入るものと思われる。文様下端は1条の沈線で区画される。LRの縄文は底部付近にまで施される。13は上下に連結するJ字文と、下に連結するJ字文とが交互に描かれる。無節Lの縄文が、施文単位の末端を強く押し付けて施文される。205はLRの縄文が充填される。

b種 (22、184、244)

微隆起線により文様が描かれるものである。22は波状縁を呈し、波頂部には楕円に隆帯が施される。隆帯上には沈線、円形刺突が施文される。また、微隆起線の脇には円形刺突が沿う。縄文はLRが使用される。184は微隆起線で上下を区画された中に、円形刺突列が2段に施文される。244は中央を凹ませた隆帯が、渦巻き文状に施文される。縄文はLRが用いられる。

c種 (14、183～185)

縄文帯上に円形刺突が施されるものである。14は筒状突起を有する。J字文は1段構成をとり、縄文はLRが施される。関沢類型に施される口辺部の刺突列が、体部文様に取り込まれる過程を示す資料であると考えられる。183は角頭状の口唇をもつ。口辺部にJ字の貼り付け文が施され、そこから下に隆帯が伸びる。隆帯の要所には刺突が施される。185は鉢形土器の口縁

部である。

d種 (4、15~21、186~204、206~243)

縄文帯と無文帯により、J字文等の文様が描出されたものである。4は上下2段のJ字文が反転している。縄文はLRが充填される。15は無文部分によりJ字文が描出される。縄文はLRが施される。16は強く括れ、貫通孔のある突起をもつ土器である。突起の内面には、刺突が施される。縄文はLRが施文される。17は小波状縁の波頂部に、渦巻き状の隆帯が貼付された土器である。縄文はLRが施される。18はJ字文2段構成をとる土器である。縄文は無節Lが施文される。実測図右端には、1度沈線で文様が描かれた後に、磨り消された痕跡が認められる。19~21はLRの縄文帯で文様が描出されたものである。20は剥落が激しいが、口縁部無文帯下に隆帯が1条巡っていた可能性がある。189は突起の右側面に円孔を有する。191は縄文帯の起点に瘤状の貼り付けが施される。193は突起部に、対向C字状の刺突連繫沈線文が施文される。194、195は突起である。187~193、196~204、206~242はLRの縄文が施される。

e種 (23~25、245~259、317)

波状縁を呈し、波頂部より隆帯が垂下する土器である。隆帯は刻みをもつものが多い。23は口径27cmを測る。4単位の波状縁を呈し、大突起を1つ有する。波頂部は両側面から粘土が盛り上がるような形態をとる。文様は、隆帯に沿ったジグザグ懸垂文と蕨手文、渦巻き文を主とする。縄文はLRが施文される。24は隆帯が波頂部の内面にまで施され、その両脇には刺突が行われる。口縁の内面には強い稜をもつ。縄文はLRが施文される。25は襷状に隆帯が施されたものである。245は口辺部に展開するLRの縄文帯上に刺突列が施されており、第3種との複合形態をとる。247は波頂部が、前後にずれた山形を呈する。中央を凹ませた円形貼り付けが施され、2分された無刻隆帯が垂下する。253は隆帯の断面が三角形を呈し、刻みをもたない。317は環状の突起であろう。頂部は刺突のある隆帯が貼付され、内面には刺突連繫沈線文が施される。246

~253、253~257、317はLRの縄文が施文される。

第3類 (第20図5、6、第22図26、第29図260~第30図312)

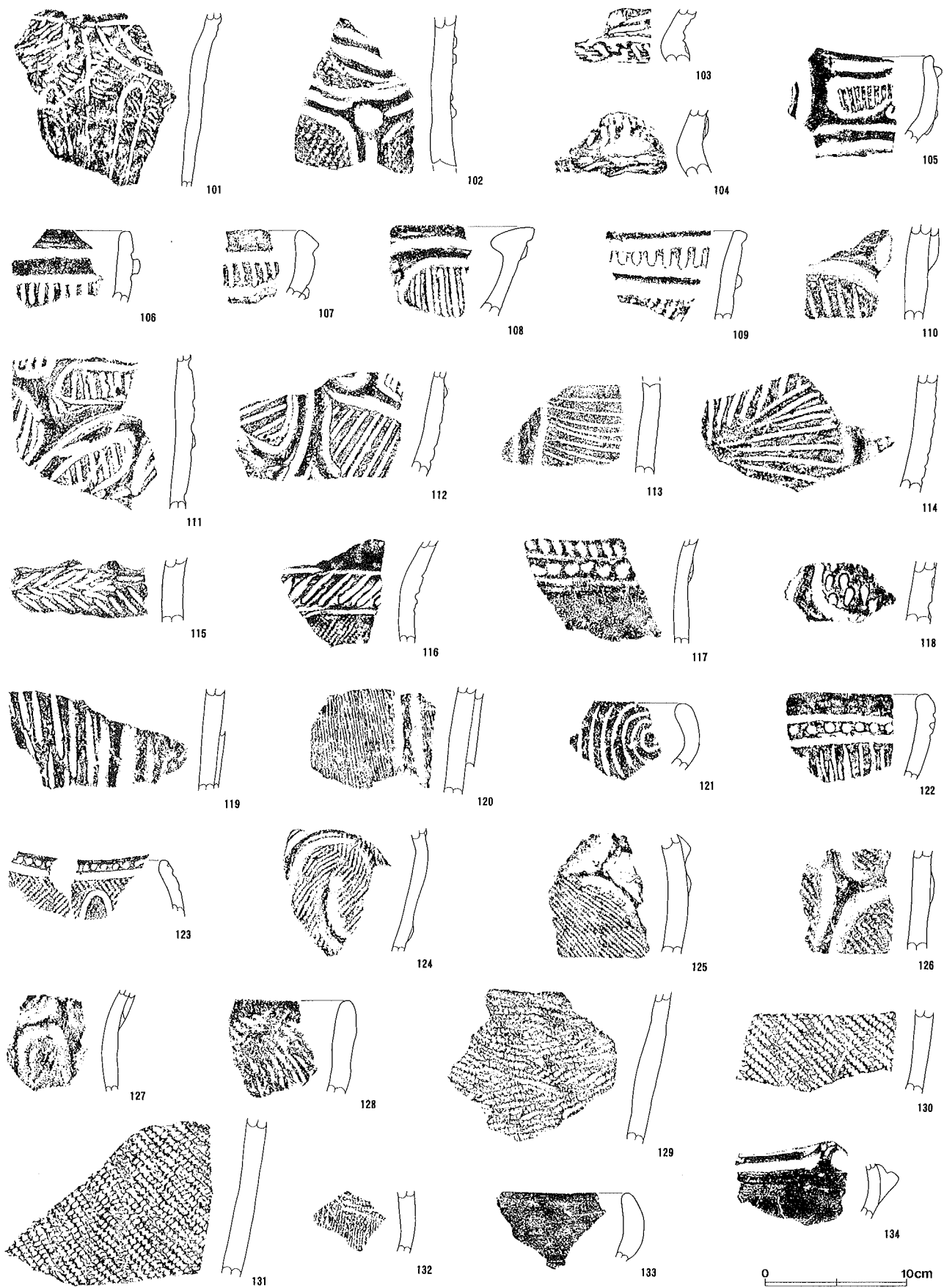
称名寺Ⅱ式土器である。5は先端がR字状になるJ字文の2段構成をとる。J字文間には別の文様意匠が描かれる。充填される列点にはやや長めのものと短いものがあり、意図的に施文されていると思われる。口唇はやや丸みを帯び、口径は21.5cmを測る。6は、「く」の字に内屈する大型の鉢形土器である。文様は微隆起線により渦巻き文が描かれ、渦の中心には刺突が施される。色調は燈褐色を呈する。北塚屋遺跡第107号土壙出土土器に類似する資料である。260は有刻垂下隆帯をもち、列点が施された土器である。271、275、279はR字文が施文される。280は波頂部下に円孔を有し、口唇部に隆帯が波状に施される。281は突起上の対向C字状の刺突連繫沈線文が、突起周囲の口端に沿って展開したものである。波頂部の内面にも刺突が施される。地文は認められない。305は刺突が密に施文される。

第6群土器 (第30図313~316、318、319)

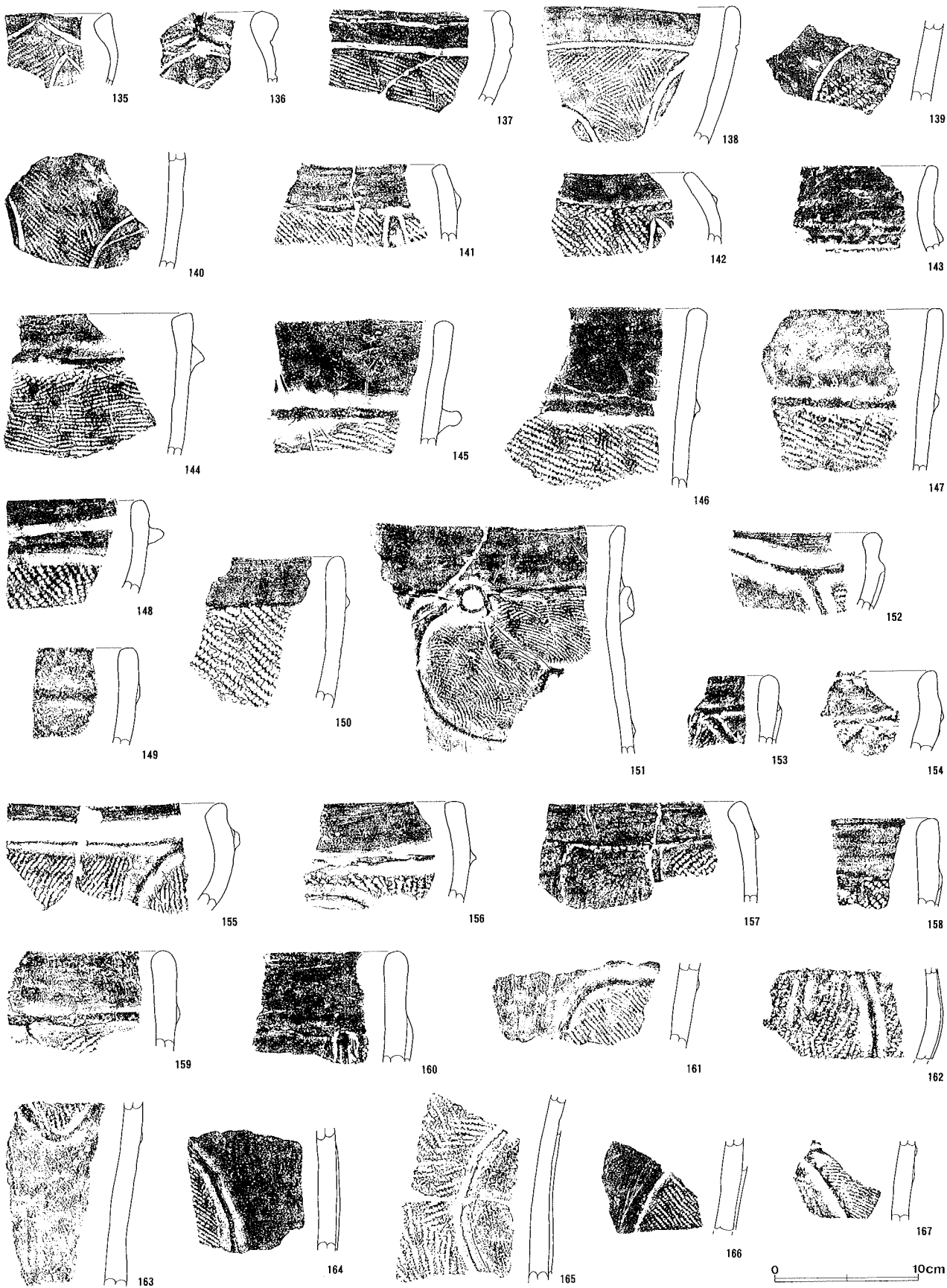
堀之内Ⅰ式土器である。313は口唇部に3条の沈線が巡る土器である。314は甕形土器である。内屈する口唇部に沈線が1条巡らされ、口縁部無文帯と胴部の区画部には、微隆起線が施される。胴部文様の起点には、盲孔を伴う円形貼付文が施される。315は緩波頂部を逆C字形に盛り上げ、中央に刺突が施される。口唇部には沈線が巡る。316は突起部である。中央に刺突が施され、両側に沈線が展開すると思われる。突起先端にも小刺突が施される。整形は雑である。318は逆C字状の隆帯上に、刺突連繫沈線文が施されたものである。319はLRの縄文帯による渦巻き文が施文された小型土器である。

第7群土器 (第21図7、第22図27~29、第31図320~331)

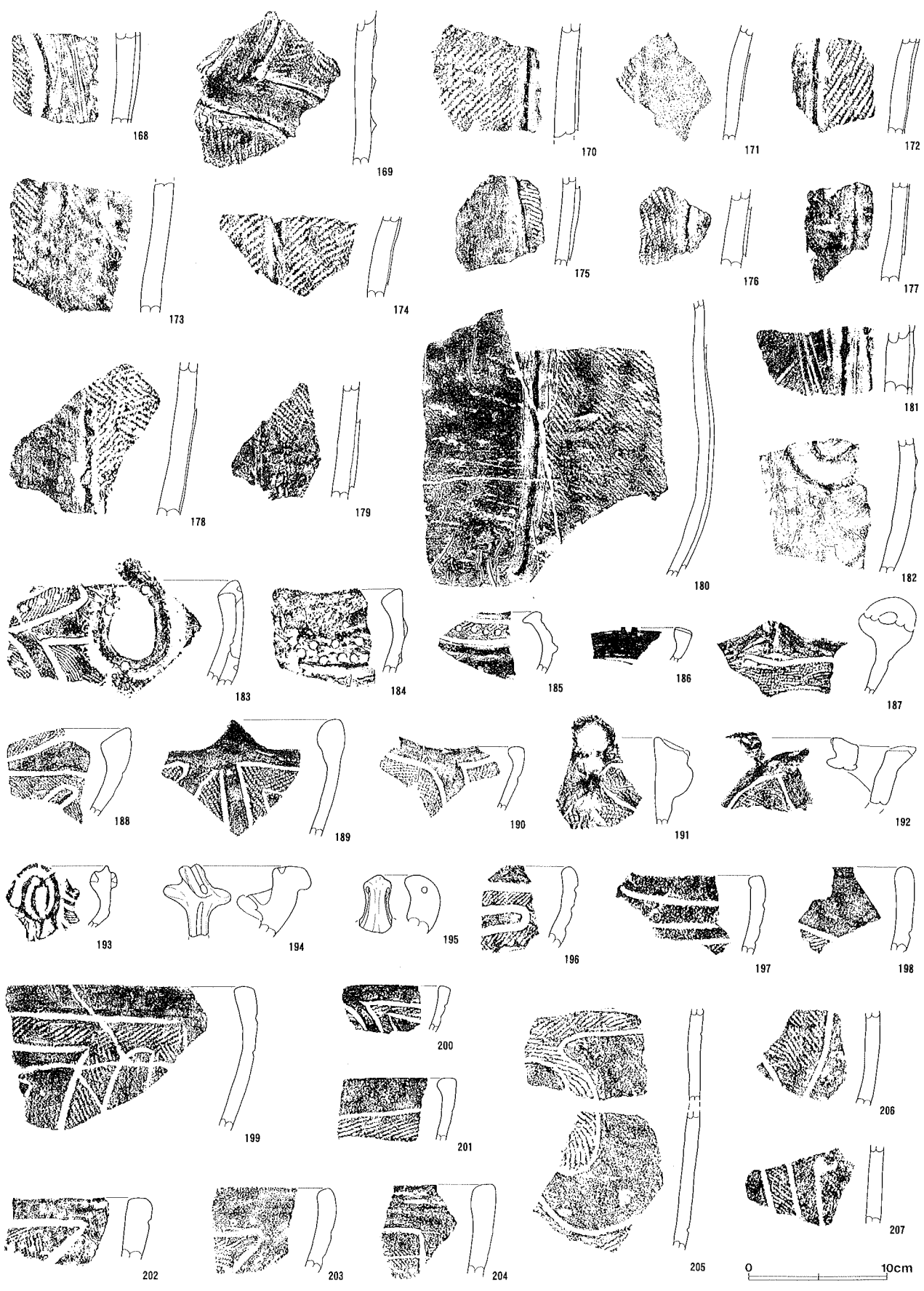
条線のみ施されたもの、無文の資料を一括した。いずれも中期末~後期初頭の所産と思われる。7、28、29、330、331は無文土器である。7は口径32cm、器高



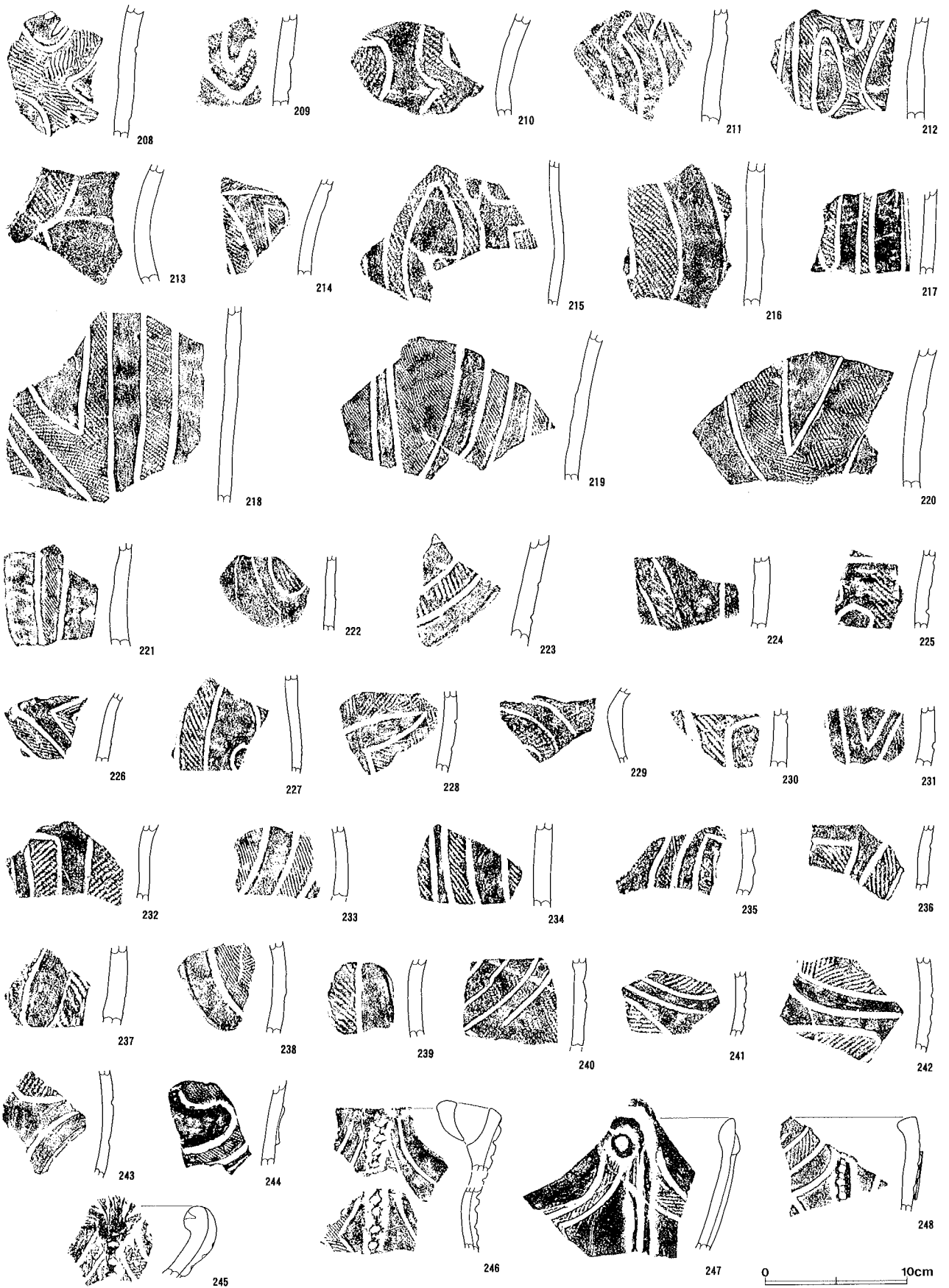
第 25 图 埋没谷出土遺物 (6)



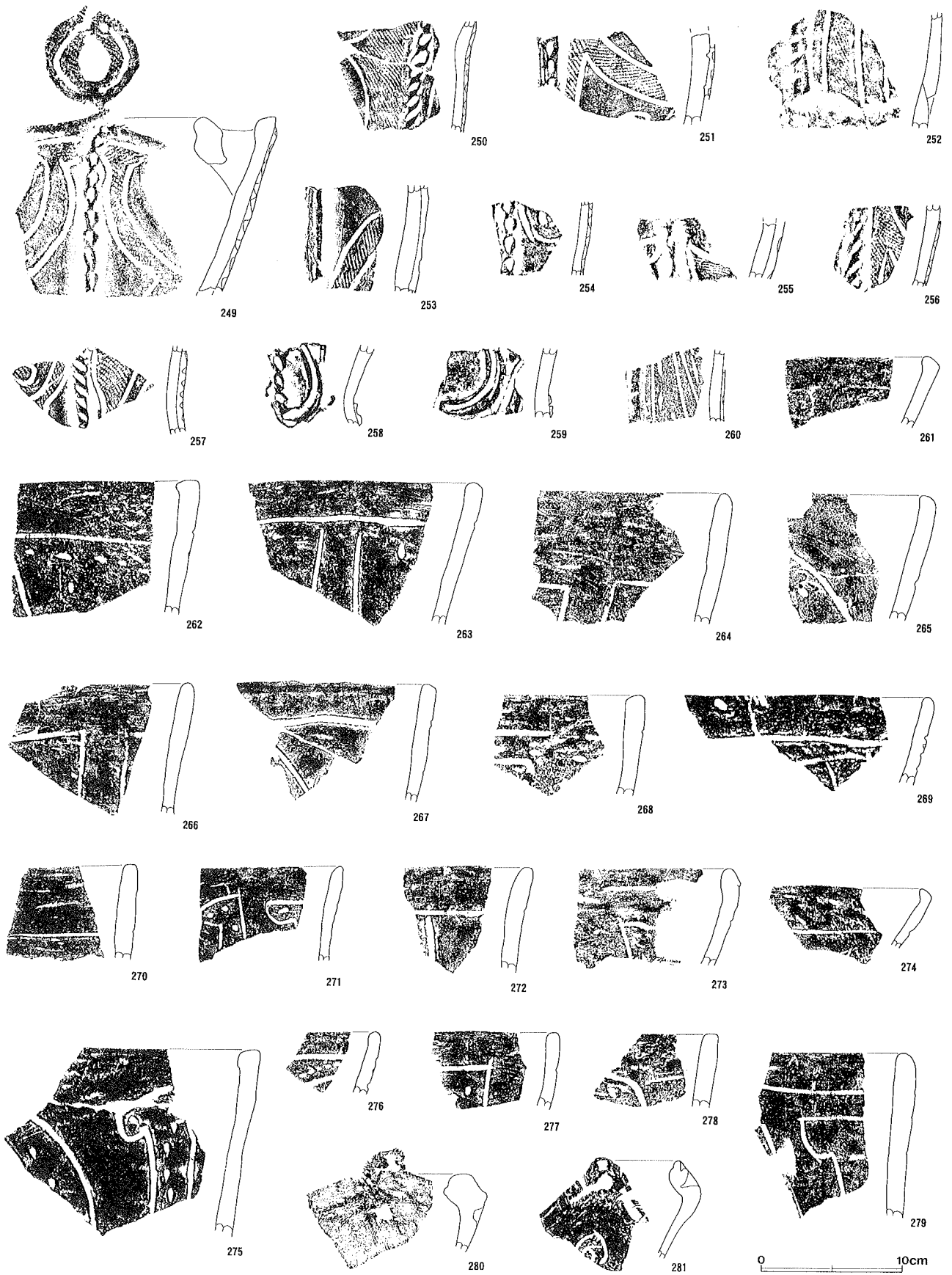
第 26 図 埋没谷出土遺物 (7)



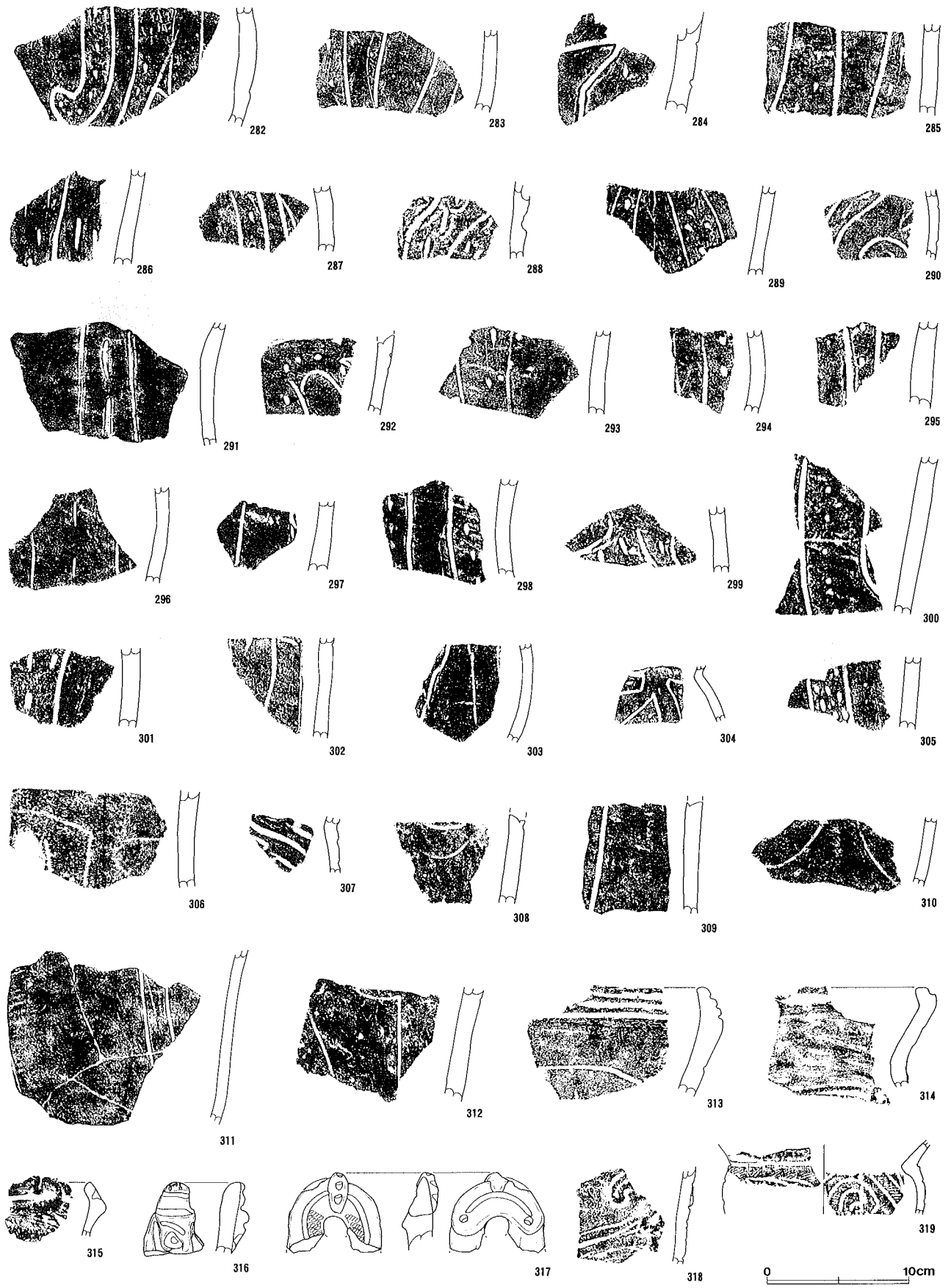
第 27 图 埋没谷出土遺物 (8)



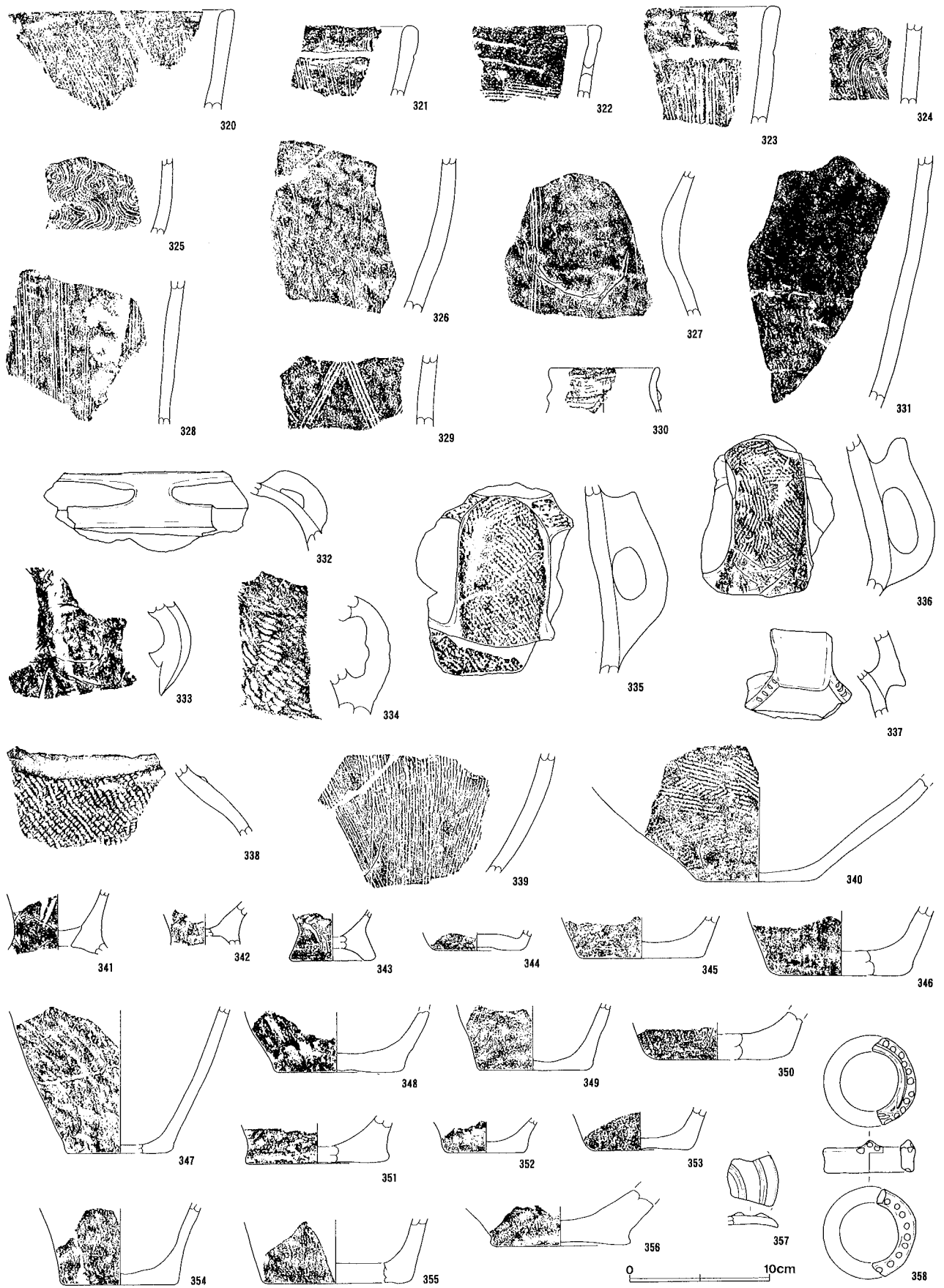
第 28 图 埋没谷出土遺物 (9)



第 29 图 埋没谷出土遺物 (10)



第 30 图 埋没谷出土遺物 (11)



第 31 图 埋没谷出土遺物 (12)



第 32 図 埋没谷出土遺物 (13)

48.6cmを測り、器形は砲弾形を呈する。整形はなでによって行われ、整形痕が看取できる。縄文が施文されたとみられる跡が、わずかに認められるが、磨り消されている。口唇上などに指頭圧痕とみられる凹文が不規則に施される。焼成および器面の状態はあまり良好ではない。28はやや括れる器形である。なでの整形が行われ、整形痕が残る。焼成は普通である。330は小型土器である。わずかに括れ、括れ部には微隆起線が巡る。器面は丁寧に磨かれる。27、320～329は条線が施された土器である。322は横位に条線が施される。329は4本単位の条線により、格子目文が描かれる。

第8群土器（第31図332～340）

壺形土器を一括した。いずれも中期末～後期初頭の所産と思われる。322は強く内湾する器形を呈する。333～337は両耳壺の把手である。338はRL、339LRの縄文が施文される。

第9群土器（第22図30、第31図341～356）

時期の特定できない、底部資料を一括した。341～343は小型台付き鉢の底部、その他は深鉢、あるいは浅鉢の底部である。

土製品（第31図357、358）

357は蓋形土器である。微隆起線が弧を描くように施される。358は滑車形の耳飾りである。小突起をもち、両面に円形刺突列が巡る。

石器（第32図）

359は石鏃、360は二次加工のある剥片である。ともにチャート製である。359は赤色を呈する。361～377は打製石斧である。378は安山岩製の磨石である。両面及び片側面に凹部が認められる。379、380は石皿の残片である。

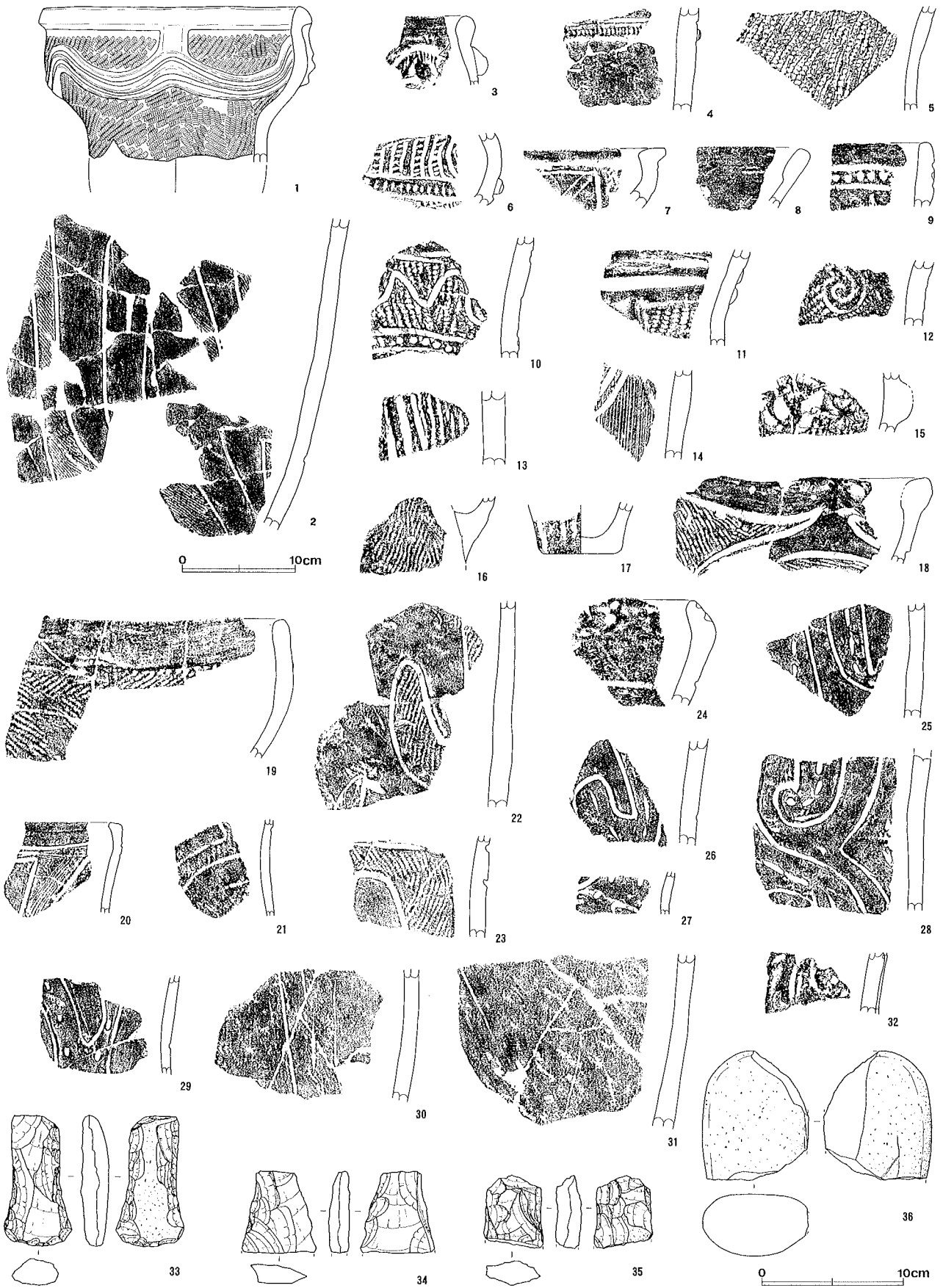
5 グリッド出土遺物

第33図にグリッド出土遺物を示した。1は12号土壇のところで述べたように、調査区壁際から出土した伏甕である。口径22.5cmを測る。文様は3分された隆帯による波状文である。隆帯の断面は三角形を呈する。波状文は5カ所で起伏し、口辺部肥厚帯と3カ所で繋がれる。LRの縄文が、器面が軟らかい状態で施文されている。5および36の磨石は1に伴って出土した。3点は一括性が高く、全て中峠式期の所産と思われる。

3、4、6は中期中葉の土器である。3は瘤状の貼り付け文をもつ。6は有刻隆帯が横位に巡り、刻文帯により重弧状の文様が描かれる。7～17は中期後葉の土器である。7、8は浅鉢の口縁部である。7は竹管状工具による平行沈線が施文される。9、10は刺突列が施されるものである。10はLRの縄文を地文とし、頸部に波状沈線が施文される。11はRL縄文を地文とし、隆帯で区画文や懸垂文が施される。12は地文のRL縄文と、渦巻き文が描かれる。13はLの撚糸文と垂下隆帯が施文される。14は条線を地文とし、連弧文が描かれる。15は瘤状貼付文とLの撚糸文が施されたものである。16は両耳壺の把手部であろう。RLの縄文が施文される。17は沈線が垂下する底部資料である。

18～19は中期末～後期初頭の所産と思われる。18、19は加曾利E式系統の土器である。共にLRの縄文が施文される。18は波状線を呈し、玉抱き波状文が施文される。19は口辺部に微隆起線が巡る。20～32は称名寺式土器である。20は条線が充填される。22はJ字文が2段に描かれる。22、23はRLの縄文が施文される。25～31は、列点が充填される称名寺II式土器である。24、32は称名寺式末～堀之内1式初頭の所産であろう。24は内屈する口唇部に、2個の刺突が縦に施される。32は隆帯上に刺突連繫沈線が施される。

33～35は打製石斧である。33は表土、34、35は攪乱内からの出土である。



第33図 グリッド出土遺物

番号	出土遺構	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石材	註記
第6図 62	第1号住居跡	横刃型石器	6.4	(7.3)	1.8	ホルンフェルス	
63	"	"	7.5	(6.2)	1.5	"	S J 1-26
64	"	礫器	8.0	7.1	2.1	砂岩	
65	"	打製石斧	(8.1)	5.6	1.9	"	
66	"	"	(8.5)	4.6	1.5	"	S J 1-42
67	"	剥片	5.7	5.6	1.1	"	
68	"	残核	2.8	2.8	1.4	黒曜石	S J 1-75
第10図 10	第3号住居跡	磨石	(6.7)	(5.7)	2.3	安山岩	S J 3炉1
11	"	"	8.5	6.8	4.4	"	S J 3炉1-1
36	"	"	(6.5)	7.7	4.5	"	配石下
37	"	石皿	17.3	10.3	3.2	砂岩	配石
38	"	"	(20.0)	(20.5)	10.0	安山岩	配石-1
39	"	"	(17.1)	17.6	7.8	砂岩	配石-1
第14図 3	第1号土壙	打製石斧	15.5	11.3	3.3	ホルンフェルス	
6	第9号土壙	"	8.3	5.6	1.4	"	
7	"	"	(5.3)	4.3	1.4	砂岩	
2	第11号土壙	"	(9.3)	3.9	1.0	"	
第15図 18	第12号土壙	"	(4.9)	4.5	1.5	"	
19	"	"	(6.2)	4.4	1.1	ホルンフェルス	
20	"	"	(10.8)	5.8	2.3	砂岩	
9	第13号土壙	"	(7.3)	5.2	2.4	ホルンフェルス	
10	"	"	(6.1)	4.3	1.8	"	
11	"	"	10.8	4.8	2.7	"	
3	第17号土壙	石皿	(11.4)	(12.3)	4.8	砂岩	
4	"	砥石	(10.4)	4.6	2.4	"	
第17図 5	D 3 P 6	打製石斧	10.1	7.4	1.9	粘板岩	
第32図 359	埋没谷	石鏃	3.2	2.0	0.5	チャート	
360	"	二次加工のある剥片	3.8	3.1	1.2	"	
361	"	打製石斧	(5.0)	3.9	1.2	砂岩	
362	"	"	(6.3)	3.9	1.5	ホルンフェルス	
363	"	"	(6.3)	3.9	1.6	"	
364	"	"	9.4	4.1	1.2	"	谷-39
365	"	"	(7.1)	4.5	1.6	砂岩	谷-373
366	"	"	(7.9)	5.0	1.5	ホルンフェルス	谷-147
367	"	"	(10.7)	3.9	1.4	砂岩	谷-336
368	"	"	(5.2)	3.5	(0.9)	"	谷-641
369	"	"	(6.3)	6.6	1.8	ホルンフェルス	
370	"	"	(6.5)	7.0	2.2	砂岩	
371	"	"	(8.3)	4.0	2.3	粘板岩	谷-446
372	"	"	(7.4)	4.2	1.2	砂岩	
373	"	"	5.1	4.3	1.2	ホルンフェルス	
374	"	"	(5.9)	3.6	1.2	"	
375	"	"	(11.8)	5.6	2.1	"	谷-405
376	"	"	12.4	5.0	1.6	砂岩	谷-605
377	"	"	(8.0)	4.8	2.1	"	
378	"	磨石	9.2	7.4	4.2	閃緑岩	谷-55
379	"	石皿	(14.0)	(10.2)	(5.1)	砂岩	谷-655
380	"	"	(15.0)	(11.0)	7.3	安山岩	谷-475
第33図 33	グリッド	打製石斧	9.3	4.9	1.8	砂岩	
34	"	"	(5.8)	5.3	1.3	ホルンフェルス	
35	"	"	(5.2)	4.3	1.7	"	
36	"	磨石	(9.2)	7.5	4.4	安山岩	D 2-2

第1表 石器計測表

IV 結 語

前章まで述べてきたように、小台遺跡の今回の調査で、住居跡3軒、土壙18基、ピット51基、そして遺物を多量に包含する埋没谷が検出された。また調査区の壁際からは、縄文中期中峠式期の伏甕が、かろうじて攪乱を免れた状態で検出された。伏甕を囲むように、周辺にピットが巡っており、ここが住居跡であった可能性が高い。それを含めると、住居跡は中峠式期1軒、加曾利EⅡ式期1軒、加曾利EⅢ式期1軒、堀之内1式期1軒となる。また堀之内1式期の第3号住居跡の南側には配石遺構があり、住居に伴うものと考えられる。このように、狭い範囲でありながら、大変密度の濃い成果が得られた調査であったと言えよう。

住居跡については、参考に過去の調査で検出されたものを整理すると、次の通りである。

第1次調査(調査地不明)…加曾利E式期2軒、称名寺I式期1軒(報文中では貯蔵穴)

第2次調査…加曾利E式期2軒、称名寺I式期1軒、時期不明9軒

第4次調査…加曾利E式期2軒

第6次調査…時期不明2軒

時期の特定できないものを除くと、最も多い加曾利E式期と、称名寺I式期に集中する。今回の調査では、これまで集落の最初と考えられてきた中期中葉と、最後と考えられてきた後期前葉の住居跡が、初めて検出されたことは大きな成果であると言えよう。また炉跡が検出された住居跡は、3軒とも覆土のほとんどを失っている状態であったが、炉跡の遺存状態は非常に良好であった。特に第3号住居跡の2基の炉跡は、掘り込みが深く、壁が良く焼けて硬化していた。住居の時期である堀之内1式土器の出土は、調査区全体を含めて少量であるものの、この時期まで確実に集落が営まれていたことを示す貴重な資料である。

土壙は第11、12、15～17号土壙を除き、ほぼ直径1m前後の円形に近い土壙である。この内、第13、14

号土壙の底面付近からは中峠式期の土器が出土しており、該期の所産と考えられる。両者の覆土は、焼土粒を含む暗茶褐色土であり、非常に類似している。これに対しその他の円形土壙の多くは、ローム粒を多く含む黒褐色土を覆土とする。また第15～17号土壙も形態は異なるが、同様の覆土をもつ。出土遺物はいずれも少量であり、土壙の埋没時に流れ込んだものとも考えられるが、後世の遺物の出土が皆無のため、縄文時代の所産の可能性を指摘するに留めたい。また第11、12号土壙は掘り込みが浅く、形態も不整形である。第11号土壙は集落の終末期である堀之内1式期の配石遺構を破壊しており、堀之内1式期、或いは後世のものであると考えられる。第12号土壙は中期中葉～後期初頭の土器が出土していることから、後期初頭のもの可能性がある。

埋没谷からは多量の土器が検出された。底面付近に無遺物層を有し、上層に土器破片等の遺物を多く含んでおり、隣接する過去の調査区で検出されたものと性格を同じくする。しかし今回の調査区のB-2グリッド南西部から、復元個体を多く含む土器集中地点が確認された。この地点においては、無遺物層が認められず、遺物が底面からも出土している。底面付近には破片資料が多く、覆土中層に個体資料が集中しているのが特徴である。埋没過程のある時期に、土器の一次的な廃棄場所として意識されていることが推測される。これらのことから、土器集中地点は周辺と性格を異にしており、その理由を検討する必要がある。

出土土器は黒浜式、諸磯b式、中期中葉～後期堀之内1式である。前期、中期中葉、堀之内1式土器は出土量がわずかであり、埋没時或いは埋没後に流入したものと思われる。中期後葉の土器は覆土の全体に分布し、全て破片資料である。分布状況から、ほとんどは後出の土器と伴出しており、流れ込み的な状況が推測される。土器集中地点からは、後期初頭、特に称名寺

式中位の段階のものが目立つ。底面付近の破片資料と、覆土中に集中する個体資料との間には、ほとんど時間差が認められない。

また、称名寺式初頭段階の土器の出土はほとんど認められない。当地域においては、この段階の土器の検出は非常に少なく、その間隙を加曾利E式系統の土器が埋めるものと考えられる。称名寺式（中津式）系統と加曾利E式系統の併行関係は、称名寺式の初期段階において特に、両者の接触の度合いによって地域差が生じるものと思われる。そのため地域ごとに、共伴関係や型式内部の変容を細かく探っていくことが必要であり、今後の課題としたい。

今回の第7次調査では上記のとおり、多くの成果が得られた。このことは、小台遺跡が深谷市を代表する縄文集落であることを再確認させてくれるものである。

しかし遺構の確認面までは非常に浅く、住居跡の覆土がほとんど失われている状態であった。過去の調査で検出された遺構の遺存状態も、必ずしも良好なものが多いわけではない。現在、小台遺跡はわずかな保護層によって守られていることが実感できる。しかし今回の調査区のように、遺構の一部は失われていても、炉跡や埋没谷等、遺構や集落の核となる部分が良好な状態で残されている場所がまだまだあることが分かった。今後も多くの開発が行われることが予想されるが、私たちは今まで以上に遺跡の保護に努める必要がある。

最後に改めて、この発掘調査に深いご理解とご協力をいただいた関口和正氏をはじめ、小台遺跡の発掘作業、整理作業に携わり、文化財を記録保存して後世に残すことにご尽力いただいた皆様に敬意を表する。

〈参考文献〉

- 石坂 茂 1990 「群馬県内の称名寺式土器」『縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会
- 小沢国平 1957 「深谷市小台遺跡調査報告書」埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 古池晋禄 1989 「小台遺跡（第5次）」埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
- 〃 1989 「小台遺跡（第4次）」埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
- 澤出晃越 1987 「小台遺跡（第3次）」埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集
- 鈴木徳雄 1990 「称名寺・堀之内1式土器研究の諸問題」『縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会
- 〃 1990 「称名寺式土器」『調査研究集録』第7冊 横浜市文化財センター
- 〃 1995 「称名寺式における充填列点紋の成立」『群馬県考古学手帳』5 群馬土器観会
- 谷井 彪他 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井 彪、細田 勝 1995 「関東の大木式・東北の加曾利E式土器」『日本考古学』第2号
- 〃 1997 「水窪遺跡の研究」『研究紀要』第13号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中島広顕他 1998 「七社神社前遺跡Ⅱ」北区埋蔵文化財調査報告第24集
- 蛭間真一他 1979 「小台遺跡」深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書

写真図版



調査区全景



第1号住居跡



第1号住居跡炉跡



第1号住居跡埋壘



第2号住居跡



第2号住居跡炉跡



第3号住居跡(1)

図版 2



第3号住居跡(2)



第3号住居跡炉跡



第3号住居跡遺物出土状況(1)



第3号住居跡遺物出土状況(2)



配石遺構



埋没谷



埋没谷遺物出土状況(1)



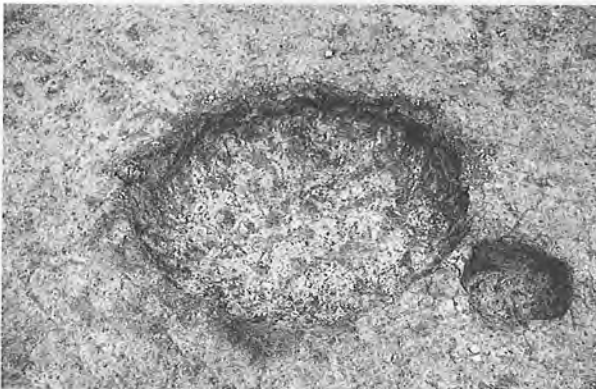
埋没谷遺物出土状況(2)



グリッド遺物出土状況



第1、2号土壙



第5号土壙



第9号土壙



第13号土壙



第13、18号土壙



第14号土壙



第15～17号土壙

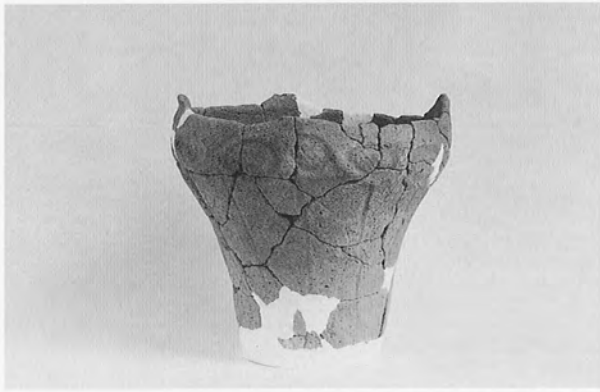
图版 4



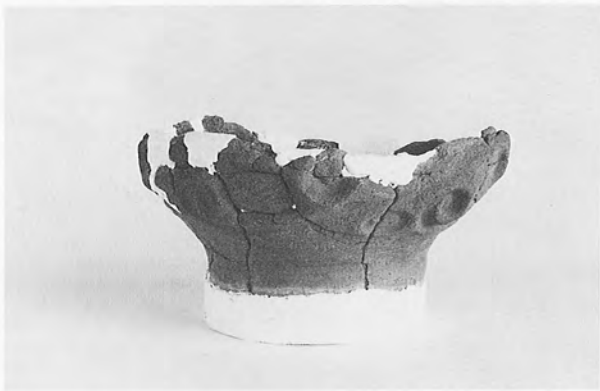
第 1 号住居跡 1



第 1 号住居跡 2



第 1 号住居跡 3



第 2 号住居跡 1



第 3 号住居跡 1



第 3 号住居跡 2



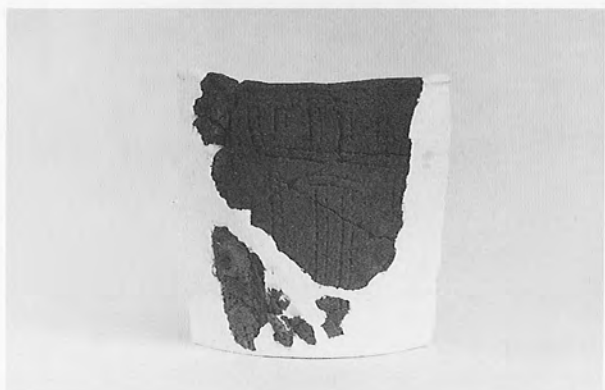
第 12 号土坑 16



第 13 号土壙 1



第 13 号土壙 2



第 14 号土壙 1



埋没谷 2



埋没谷 1

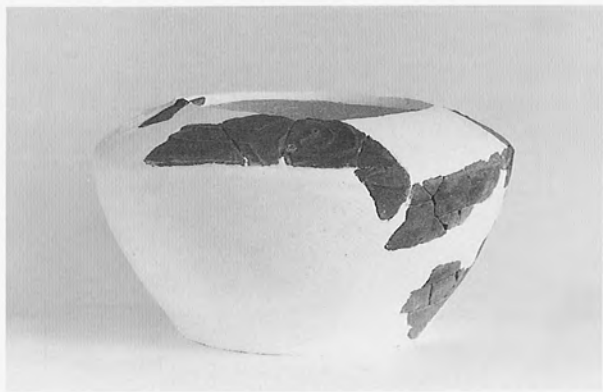


埋没谷 4



埋没谷 5

图版 6



埋没谷 6



埋没谷 7



埋没谷 13



埋没谷 14



埋没谷 15



埋没谷 16



埋没谷 18



埋没谷 23



グリッド 1



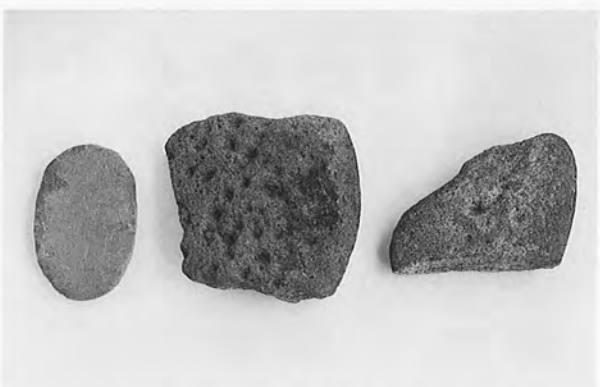
第 1 号住居跡出土遺物 (1)



第 1 号住居跡出土遺物 (2)



第 3 号住居跡出土遺物 (1)



第 3 号住居跡出土遺物 (2)



第 2 号住、第 2・3 号住ピット出土遺物



土壇出土遺物 (1)

図版 8



土壙出土遺物 (2)



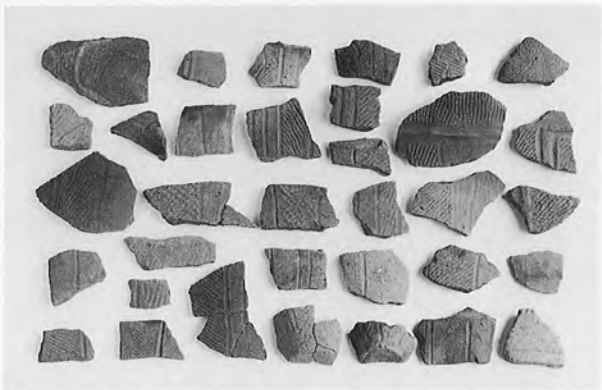
埋没谷出土遺物 (1)



埋没谷出土遺物 (2)



埋没谷出土遺物 (3)



埋没谷出土遺物 (4)



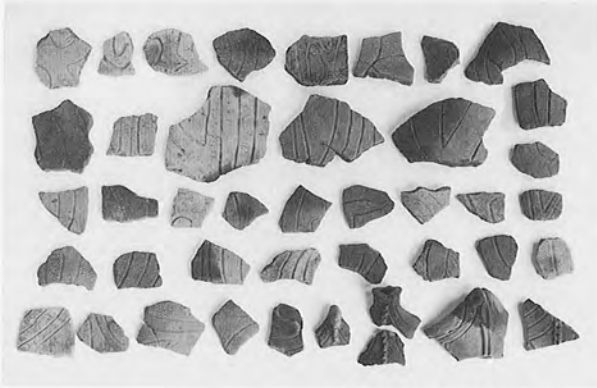
埋没谷出土遺物 (5)



埋没谷出土遺物 (6)



埋没谷出土遺物 (7)



埋没谷出土遺物 (8)



埋没谷出土遺物 (9)



埋没谷出土遺物 (10)



埋没谷出土遺物 (11)



埋没谷出土遺物 (12)



埋没谷出土遺物 (13)



ピット、グリッド出土遺物



グリッド出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こだいいせき (だい7じちょうさ)							
書名	小台遺跡 (第7次調査)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第60集							
編著者名	知久裕昭							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 埼玉県深谷市本住町17-3 TEL 0485-72-9581							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査	調査	調査
所収遺跡	所収遺跡	市町村	遺跡	(°'")	(°'")	期間	面積	原因
こだいいせき	ふかやしおおざうわのだいあざおやしき					19980506		分譲
小台遺跡	深谷市大字上野台 字御屋敷2345-1	11218	89	36 10 40	139 17 17	19980529	200m ²	住宅
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
小台遺跡	集落	縄文中期 後期	竪穴住居跡 3軒 土 墳 18基 埋 没 谷	縄文土器 石 器				

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第60集

小 台 遺 跡 (第7次調査)

印 刷 平成11年3月29日

発 行 平成11年3月31日

発 行 深 谷 市 教 育 委 員 会

印 刷 た つ み 印 刷 株 式 会 社

